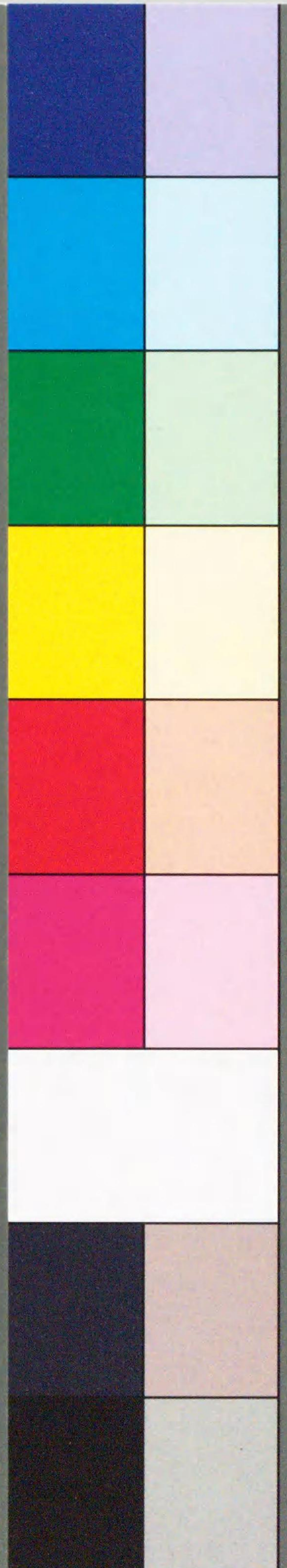


inches 1 2 3 4 5 6 7 8
cm 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19

Kodak Color Control Patches

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black



Kodak Gray Scale

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19



© Kodak, 2007 TM: Kodak

DL316

24



草創時代に於ける

札幌の工業



札幌商工會議所編

草創時代に於ける

札幌の工業

DL316
24

緒言

北海道の首都として、政治經濟の中心を成して居る我札幌市も、七拾年以前の狀態を回顧すれば、熊鹿狐狸の棲息横行する廣き野原に過ぎなかつた。夫れが現在の狀態に迄發達した創成の歴史は、實に貴重なる幾多の史料を含み、あらゆる點に於て、後世に傳へ裨益する所尠くないと思ふ。

當會議所は茲に考ふる所あり、主として商工業に關し、札幌市の歴史を編纂する事となり、擔任者を定め、銳意資料の蒐集に努めつゝあるが、本年は恰も當會議所創立三十周年に相當するを以て、此機會に於て先以て創業時代より明治二十六年に至る期間の札幌市の工業に就

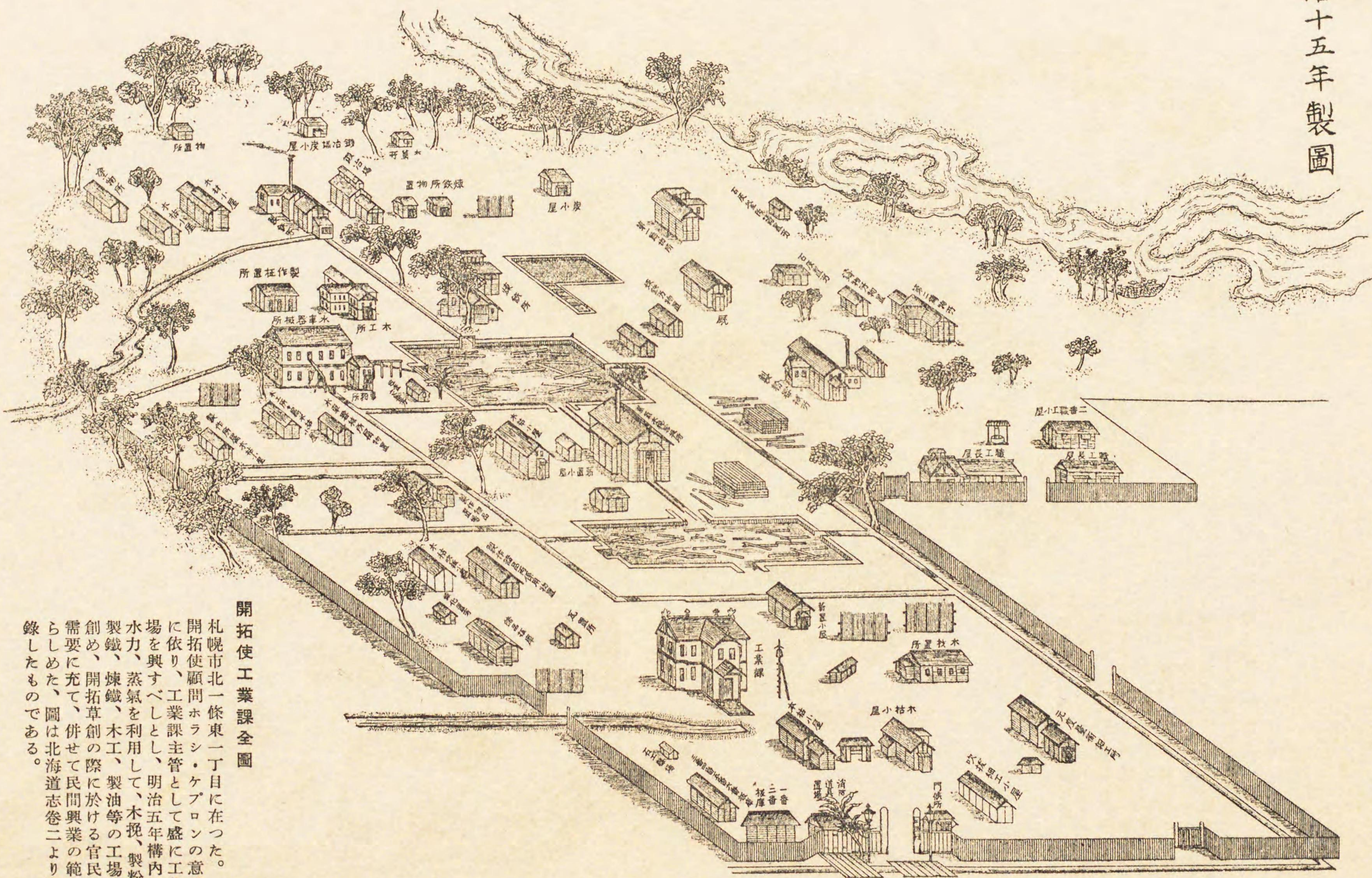


502.1

77W23866

て編述する事とした。本篇を草するに方り限なく文献資料を涉獵し、又古老の談話を参考にし、其正確を期したが、統計或は記録の缺如せるものあり、遺憾の廉尠なからざるを覺ゆるも、不取敢之を世に贈り識者の示教を乞ひ、他日補正し札幌商工史工業編の一部とする考である。

明治十五年製圖



開拓使工業課全圖
 札幌市北一條東一丁目に在った。
 開拓使顧問ホラン・ケプロンの意見
 に依り、工業課主管として盛に工作
 場を興すべしとし、明治五年構内に
 水力、蒸氣を利用して、木挽、製粉、
 製鐵、煉鐵、木工、製油等の工場を
 創め、開拓草創の際に於ける官民の
 需要に充て、併せて民間興業の範を
 示した。圖は北海道志卷二より採
 録したものである。

草創時代に於ける札幌の工業

目次

第一、官業時代の工業	一
一、開拓使七製造所	一
蒸汽木挽機械所	二
水車機械所	二
煉鐵所	三
鑄造所	三
木工所	三
製鐵所	四
厚別水車機械所	四
二、紡織所	三
三、製網所	七

四、度量衡器製造所……………二二

五、製紙所……………三三

六、製油所……………三三

七、製皮所……………三五

八、麥酒釀造所……………三七

九、葡萄酒釀造所……………三三

十、醬油味噌釀造所……………三九

十一、製粉所……………四四

十二、活版印刷所……………四四

十三、馬具製造所……………四五

十四、酒造業……………五五

第二、民業勃興時代の工業……………五七

一、製絲業……………五七

二、製麻業……………六〇

三、織物業……………六九

四、製網業……………七三

五、染色業……………七三

六、鐵工業……………七四

七、鑄物業……………七四

八、木工業—木具—洋樽—軸木……………七五

九、硝子製造業……………七六

十、硝石業……………七七

十一、骸炭業……………七七

十二、製藍業……………七七

十三、麥酒製造業……………八一

十四、葡萄酒洋酒業……………八六

十五、酒造業……………八八

十六、醬油味噌釀造業……………八九

十七、製粉業……………九〇

十八、製糖業……………九三

十九、精米業……………九六

二十、製箔業……………九九

二十一、活版印刷業	九
二十二、馬具製造業	一〇〇
二十三、製靴業	一〇一
二十四、電氣業	一〇三
二十五、土木業	一〇四

草創時代に於ける札幌の工業

第一 官業時代

一、開拓使七製造所

明治十九年に至る期間に於ける札幌の工業は其の大部分開拓使或は札幌縣の施設經營に屬するものである。明治四年札幌本廳草創の際道路、橋梁、屋舎等萬般の速成を圖ることとなり米國より蒸汽、水車の兩機械を購入し翌五年五月今日の東一丁目當時の札幌東創成通南一條より北一條に至る三丁餘四方を工作所設置の地と定め工業課を設け先づ蒸汽、水車兩機械所の建設に着手し續いて鍛工所、鍛冶場、煉鐵所、鑄造所、木工所、製鐵所等の製造所を設置し又厚別にも水車所を建設した。而して之等施設の指導役として五年二月五日米人サンド・ホルト・クラルクを、六年二月一日米人エヌ・ダブリュ・ホルトを招聘した。ホルトは當時三十六歳で器械方頭取を勤めメキシコ銀で三千三百弗の年俸を受け九年七月三十一日迄札幌に居た。又クラルクは器械方補助としてメキシコ銀年俸千五百弗を受け七年二月四日迄札幌に居たが來任當時三十一歳の若冠であつた。此の兩名の指導に依り前記製造所の建設が着々進捗し明治十二年作業條例に由り之が區分を規制し蒸汽機械所、水車機械所、木工所、煉鐵所（鍛工所、鍛冶場を併せたるもの

、如し）鑄造所、製鐵機械所、厚別水車機械所の七部に分ち一箇年の資金交付額を次の通り決定した。

資本金	二、六〇八、三三七 ^円	一、一七〇、〇五五 ^円	三三、〇四四、七九 ^円	二、〇八八、〇一八 ^円	六、三六六、四六五 ^円	四、六二二、四七 ^円	三、一九八、三三四 ^円	八〇、一五九、九一〇 ^円
	蒸汽機械所	水車機械所	木工所	煉鐵所	鑄造所	製鐵所	厚別水車機械所	合計

今前記製造所設立の経過を示せば大要次の如くである。

蒸汽木挽機械所

五年六月建築に着手し主としてクラルク指導に當り洋式鋸機數基を据付け職工八名に機械の運轉を傳習せしめ其の竣成と共に木材の挽割、家材、屋根桁等の製材を開始した。超えて七年六月工場の増築をなし圓鋸、廻挽鋸、鉋鑿柄付（建具類、額縁等を製するもの）の五機械を装置した。

水車機械所

明治五年七月ホルト擔任の下に建築に着手し割地八十坪二階建とし地平より五尺下に土臺を据え尙深さ七尺餘幅九尺横一丈八尺に掘下げ水積千九百四十四立方尺の水槽を設け徑四十八吋の元車を装置し創成川より木圍堀を通して引水した。斯くて六年二月先づ圓鋸機二、堅鋸機一、桁挽機一、鉋機（屋根桁を製するもの）一、木工用鋸床一、小鉋機（額縁、建具類を製するもの）一、粉磨機（麵粉その他穀類粉磨用）一、を装置し五月に圓鋸、堅鋸、桁挽鋸、側削鉋等の運轉を試み更に鋸床、圓鋸、粉磨の三機を運轉したが元車の馬力十分でなく且つ機械を漸次装置する必要生じ木鐵製三十馬力元車一箇を模造し又梯子を架し木圍堀より木材を直ちに樓上に曳揚ぐる爲め三馬力元車一箇を増設

し、明治八年三月全く其の竣成を見るに至つた。起工より二年九月を費したのは構造の堅牢を旨としたこと、材料の悉くを東京に求めたこと又水路掘割工事の積雪に阻まれた等に依るものである。然るに十一年十二月創成川凍結し水車運轉不能となつた。尤も斯くの如き状態は毎年繰返されたことではあつたが水車の運轉支障のみならず市街の井水も同一水脈にあり井水涸渇に依り防火上に不安があつた。適々黒田長官來札、具に現狀を視察し人夫若干名を使役し厚氷を切り流した所流水常の如くなり水車の運轉を爲すことを得たと云ふやうな出來事もあつた。

煉鐵所

明治五年機械所を設けると同時に鍛工二名を東京に募り鍛工所を建て鋸床一箇を備付け更に六年八月ホツスハンダ一基を東京に於て購入穿孔、汽罐修理等の用に供した。七年一月に至り設備狹隘を感じるに至り地を轉じて新に建築し後九年五月鍛工數名を東京に募集した際増築した外同年十二月より度量衡三器の製造を爲すこととなり更に増築し度量衡器中鐵物の製造所に充てた。又八年六月には新規に鍛工所を建て煉鐵機械、鍛錐機、鋸床、金屬縦削機自動鋸床の五機を東京より購入精巧品の製造に充てた。

鑄造所

六年五月板庫一棟を建て之を一時鑄造所に充て鑄工一名を函館に募り之に傳習者二名を配し農工器具の製造を開始したが七年一月鍛工所移轉の際同時に地を轉じて鑄造所を新築し八年十一月若干改造を行ひ十一年三月更に一棟を新築し専ら鑄造の鑄造用に充てた。

木工所

八年五月工作修業者有珠郡紋鼈村より二名、石狩郡當別村より一名募り翌六月木工所を建て作業を開始した。

製鐵所

明治十二年三月製鐵所一棟を新築し元礦山機械に属した十二馬力汽關一基及二十三馬力水車一箇を備付け製鐵用機械五種を装置し又鍛工所備付の鑄床、鑽剪二種を此所に移した。

厚別水車機械所

明治十二年札幌を距る南方四里の厚別山に厚別水車機械所の築造に着手し蒸汽、水車兩機械所に屬せしめた。厚別は木材の豊富なると水利の便ある爲め此地を選んだもので設備としては桎挽三、大圓鋸一、桎鉋一、横切鋸二、鑄床一を備へ八十二馬力水車元車二基を装置し、十三年二月を以て竣成した。猶蒸汽、水車兩機械所分屬として明治七年

室蘭器械所が設置せられ十三年には根室木挽所の事業開始を見てゐるが茲には割愛することとする。以上が開拓使の手に依つて成された世に所謂七製造所と呼んでゐたものであるが同時期に製粉其の他の工業が営まれてゐるが是等に就いては夫々の項に於て記すこととし以下少しく前記七製造所の經營に關する資料を掲げて参考に資することとする。

職工例則並に取扱規則制定

明治十一年二月職工例則並に取扱規則を制定し機關取扱、鍛工、鑄物、度量衡、木工、塗師の六科とし日給を左の如く定めた。

等級	日給		
	上	中	下
一	六五錢	六錢	五〇錢
二			四五錢
三			四〇錢
四			三五錢
五			三〇錢
六			二五錢
七			二〇錢
八			一五錢

服務時間増賃金規定

十一年十月職工例則中服務時間を左の通り更正し事業繁劇に依り規定時間を超ゆる時は等級に應じ増賃金を支給することとした。

増賃等級	勤務時間		
	止	起	季節區別
一	午後四時	午前七時	自二月卅一日至五月卅一日
二	午後四時卅分	午前六時卅分	自五月卅一日至八月卅一日
三	午後四時	午前七時	自八月卅一日至十一月卅一日
四	午後四時	午前八時	
五	午後四時	午前八時	
六	午後四時	午前八時	
七	午後四時	午前八時	
八	午後四時	午前八時	

職員職工數 (明治十四年十二月現在)

種目	係員			職工												
	判任	御用掛	雇員	計	等外	上	中	下	二等	三等	四等	五等	六等	七等	八等	計
水車機械所	〇	〇	二	二	〇	〇	一	二	〇	一	二	二	〇	〇	〇	八
蒸汽木挽機械所	〇	〇	二	二	〇	〇	一	二	〇	一	二	二	〇	〇	〇	八
合計				四	〇	〇	二	四	〇	二	四	四	〇	〇	〇	三三

命 令 書

札幌區南一條西四丁目

安 田 德 治

札幌紡織機械室地所建物機具貸與スルニ付左ノ條件ヲ遵守スヘシ

第一條 札幌紡織場内機械室地所建物及機具共別冊明細書ノ通別冊ハ、明治十九年十月一日ヨリ明治二十四年九月三

十日迄貸與ス、但シ期限後尙貸下ヲ欲スルトキハ滿期百日前ニ出願スヘシ、詮議ノ上許可スル事アルヘシ

第二條 貸下物件ニ對スル抵當トシテ該價額ノ半額金六百六拾六圓ニ相當スル公債證書地所建物ヲ差出スヘシ

第三條 貸下料トシテ一ケ年純益金百分ノ五毎年四月ヨリ九月迄ノ分ヲ十月中其年十月ヨリ翌年三月迄ノ分ヲ四月

中ニ上納スヘシ

第四條 毎年四月十月兩度ニ營業上ノ景況貸下物件ノ現在調書及製造物品價格表ヲ製シ之ヲ勸業課ヘ差出スヘシ

第五條 貸下物件ノ現形ヲ變更セントスルトキハ其都度出願許可ヲ受クヘシ

第六條 一切ノ貸下物品ヲ場外ニ於テ使用シ又ハ之ヲ他人ニ轉貸スルヲ得ス

第七條 貸下期限内ニ於テ若シ不得止事故アリ廢業又ハ休業セントスルトキハ其事由ヲ具シテ指揮ヲ乞フヘシ

第八條 臨時官吏ヲ派遣シ貸下物件及營業ニ係ル一切ノ帳簿ヲ検査スル事アルヘシ

第九條 前條ノ場合ニ於テ貸下物件ニ破損又ハ不足等アルトキハ臨時官吏ノ指揮ニ應ジ速ニ之ヲ修理調整スヘシ

第十條 貸下中ニ要スル修理費及新調廢棄ノ場合ニ於テハ其營業中消費シタル修理費等ハ都テ還付セサルモノトス

第十一條 第十條ノ場合ニ於テ修理調整ヲ命シタル時ハ五日以内ニ必ス處辨スヘシ若シ正當ノ事故ナクシテ遷延シ

二日以上ニ及フトキハ當廳ニ於テ之ヲ處辨シ其費用ハ即時辨償セシムヘシ

第十二條 火災及避クヘカラサル事變ヲ除ク外貸下物件ニ生ジタル損害ハ都テ之ヲ辨償スヘシ

第十三條 前各條ニ違背シタル時ハ貸下ヲ停止シ又從ツテ損害ヲ生ジタルトキハ速ニ之ヲ辨償セシムヘシ

右 命 令 ス

明治十九年九月二十一日

三、製 網 所

明治八年十一月製網所を今日の南一條西部當時の渡島通りの舊女學校に設置し製網及製麻教師男女四名を水澤縣より傭ひ修業者數名を募つて傳習せしめた。由來本道の風土は麻の栽培に適し其の纖維強靱、光澤の美と共に野州産に譲らず且河海の漁業盛んで網の需要最も多いにも拘らず麻苧栽培或は網製造に着眼するもの少く而も朝に製シ夕に捌き家計の資に充つるに急なる爲め麻或は網を藏して漁業家の需要を俟つの餘力のないものが多かつた爲め開拓使に於て麻種を他に求めて之を貸與し麻を作らしめ網を製する意志なき者からは麻を買い上げ又綱、網等を製するものからは之を買い上げることゝした。一方製造所に於て製法を傳習せしめ或は各地に派遣して見聞を擴めしめ又製網賣捌人を置いて漁業家の需要に便し代價の如きも三ケ年賦を許す等誘掖に努めた。

斯くて明治十年には早くも各種製網を内國博覽會に出品し褒賞を受くる迄に進歩し年度内の製造高二萬五千二百二十四間、賣捌高一萬四千八百七十四間に達し、新潟、岩手方面よりの移入頓に減少し價格の如きも四、五年前に比し五割方の低下を來した。十一年に於ける製網賣捌許可人員は次の如くである。

地名	厚田	濱益	石狩	古宇	檜山	岩内	高島	小樽	合計
人員	一	一	一	一	一	二	三	四	一四

十二年六月に於ける製網従事員は當製造場に在る者男女二十二名、札幌市街及各村に在る者二百三十八人、通計二百六十人で冬期農事閑暇の期に於ては優に五百名を下らなかつた。初め漁夫等は舊習に慣れ概ね移入品を好んで本場製を欲しなかつたが本場製が強靱且つ廉價にして能く其用に耐ゆるを知り専ら之を用ふるに至つた。従つて他縣より移入の網は著しく聲價を減じた。十一年度に於ける製造高並に移入高は左表の如くである。

種目	製網		草		合計代價
	尺	代價	尺	代價	
製造高	三、五六・四〇	一八、五七・六九九	四、五五・三六〇	一、四三・〇〇	一九、七三・三三三
移入高	六九、六九・一〇〇	七、六二・四八三	二六、三四・七五五	八二、三〇・五〇〇	二三、九六・五八八
移入ノ製造ニ超過	三六、一五・六〇〇	五三、〇五・七六三	二五、八九・三七五	八〇、九七・四五〇	一〇四、二六・二五七

十二年作業條例に據り定額支辨の建物及機械等代價四千七百六十六圓九十六錢二厘を興業費に充て更に金三萬六千九百一十一圓を以て營業資本と定めた。

十三年五月に製網拂下代價三ヶ年賦完納の制を二ヶ年賦に改められた。同年六月に於ける製網従事員は市街及各村を併せ六百餘名で前年六月の現員に比すれば殆んど二倍に垂んとし農事閑暇の冬期に於ては一十名を下らなかつたものゝ如くである。

前年七月以降一ヶ年間に製網教授人派出を請ふた地方は琴似、山鼻、當別、室蘭、余市五村で資金貸付の申請を受けた地方は紋別、室蘭、余市、當別、對雁の五村に及んだ。又十三年中に製網教授人派出の願を許可したものは山鼻、室蘭二村、資金貸付許可は紋釐、千舞別、幌別、室蘭四村で其金額は總計一千三百九十圓であつた。尙十四年六月に於ける製網従事者は市街近村併せて男女八百五十四名であつた。

十五年一月現在本場職夫人員數を示せば左表の通りである。

等級	四等	五等	六等	七等	八等	計
人員	三	四	一	三	一	一二

次に製網場の全貌を窺ふ資料として二、三の表を掲げる。

種目	八年		九年		十年		十一年		十二年		十三年		十四年	
	數量	金額	數量	金額	數量	金額	數量	金額	數量	金額	數量	金額	數量	金額
製網	二、〇九・〇一〇	九、五三・六二〇	三、一〇〇・二七〇	二五、四三・〇四〇	二九、二〇八・五三三	四、三六四・五四〇	三、三〇九・七四〇	三、三〇九・七四〇	三、三〇九・七四〇	三、三〇九・七四〇	三、三〇九・七四〇	三、三〇九・七四〇	三、三〇九・七四〇	三、三〇九・七四〇
造網	一、〇〇〇・八〇〇	七、四八・六九四	一、四八七・三三六	一五、五五・〇三三	二五、八五五・四八一	五〇、三三九・四五七	二九、〇一九・二三四	二九、〇一九・二三四	二九、〇一九・二三四	二九、〇一九・二三四	二九、〇一九・二三四	二九、〇一九・二三四	二九、〇一九・二三四	二九、〇一九・二三四
高造	四、〇〇〇	七九・二二五	二、四四・四〇三	二、二六・六六一	一、〇一七・一〇一	一、四六・一〇九	三、四九二・四四三	一、五五・四九八	一、五五・四九八	一、五五・四九八	一、五五・四九八	一、五五・四九八	一、五五・四九八	一、五五・四九八
草類	三、〇〇〇	二、四四・四〇三	二、二六・六六一	一、〇一七・一〇一	一、四六・一〇九	三、四九二・四四三	一、五五・四九八	一、五五・四九八	一、五五・四九八	一、五五・四九八	一、五五・四九八	一、五五・四九八	一、五五・四九八	一、五五・四九八

科 目	計 金 額			
	八 年	九 年	十 年	十 一 年
合 計	一、八三三、三三〇	七、七〇三、〇九七	一七、〇八九、八九七	一六、五七三、六三四
職 工 費	一、六〇八、七三五	一、七六三、九七四	四、三六〇、八八六	一、三、八六、四七五
作 業 費	五、三六九	三、四二四、〇八八	二七、五二五	二、三〇、四四〇
合 計	三、四四二、〇八八	五、五〇九、三六九	一〇、一四一、七七〇	二、三〇六、〇〇〇
興 業 費	〇	〇	一、七六、五九五	〇
營 業 費	〇	〇	四三、七四六、九七七	五、七三九、五三四
收 入	〇	三、三〇〇、四九八	四三、七四六、九七七	五、六八四、六九三
營 業 費 差 引	〇	〇	〇	〇
損 益	〇	〇	〇	〇
缺 額 補 填	〇	〇	〇	五、四八四
科 目	十 年	二 年	十 年	三 年
興 業 費	〇	〇	〇	〇
營 業 費	〇	〇	〇	〇
收 入	〇	〇	〇	〇
營 業 費 差 引	〇	〇	〇	〇
損 益	〇	〇	〇	〇
缺 額 補 填	〇	〇	〇	〇
財 産 目 的	十 年	二 年	十 年	三 年
地 地	〇	〇	〇	〇
製 造 所	〇	〇	〇	〇
職 夫 舍	〇	〇	〇	〇
網	〇	〇	〇	〇
庫	〇	〇	〇	〇
機	〇	〇	〇	〇
械	〇	〇	〇	〇
合 計	〇	〇	〇	〇
表 産 財	十 年	二 年	十 年	三 年
筒 數 棟 數 及 種 類	〇	〇	〇	〇
建 坪 及 地 坪	三、六〇〇、〇〇〇	一〇、〇〇〇	二五、五〇〇	二八、〇〇〇
價 格	七、〇〇〇	一、九五六、九七六	一、四四七、八八六	一、三九七、四八二
合 計	三、六〇〇、〇〇〇	一〇、〇〇〇	二五、五〇〇	二八、〇〇〇

上記の如き状態に於て事業が續けられて行つたが、其の後漸次越後、水澤地方よりの廉價の製品に壓せられ經營頗りに困難に陥つた。十七年工業事務所に達した根室農工事務所長の報告にも、製法堅固に過ぎ賣捌心得書の不適なるを指摘して居り、十八年舊賣捌心得に拂下網代擔保提供二ヶ年賦とあるを三十ヶ月に改めた。

四、度量衡器製造所

明治九年十二月鍛工所を増築し度量衡器中金屬部分品の製造所に當て之を度量衡鑄物場と稱へ別に検査所を設けた金屬以外の部分を何處で製作したか又本事業が何年迄續けられたかは審でないが十年度に度器一萬四千九百六十三、量器一萬一千七百三十四、衡器三千六百十を製造してゐる所を見れば相當大規模に行はれたものゝ如くである。

次に古老深谷鐵三郎が明治三十三年に其の當時の情況に就いて述べてゐる所を掲げ參考に資することとする。

度量衡ハ明治九年内務省ノ達ニヨリ幕府時代ヨリ使ツテ居タモノハ悉ク廢止ニナツテ新規ノ物ヲ用ユル事ニナツタノデ夫レヲ製造致スノハ工業局デ致スコト、ナツタノデ開拓使デハ夫レノ職工ヲ雇ヒ越シタ、衡製造ノ教師ハ靜井某デ有ツタガ材料ハ悉ク内地カラ取寄セ工業ノ職工ニ手傳ハセタガ分厘秤ハ秘傳ノ有ルモノダサウデ仲々教ヘナカツタ、通常職工共ニ教ヘテ製造サシタノハ一貫二百目カラ五貫目位ノモノデ其ノ上ノ三十二貫目ノ大秤ハ是亦秘傳ガアルノデ此ノ靜井一人デ製シテ他ヘ傳授致シマセン。柵モ同様材料ハ悉ク内地カラ取寄セテ工業デ製造致シテ居リマシタガ是レ等モ夫々寸法ニ極リノアル事ハ勿論出來タ品ハ悉ク試シタ後賣下ゲルノデ其試ミマスニハ粟ヲ量ツタモノデ手ハ少シモ付ケズ其試ス器械ガアルノデ粟一粒デモ殘レバ直ニ製造ヲ致直ス事ニナツテ居タノデス尺ハ岩佐淺吉ト云フモノガ教師ニ參ツテ鯨尺曲尺吳服尺ハ勿論インチ、メートル尺マデ殘ラズ製造致シマシタガ此尺製造ニハ實ニ困ツタノデ御存知ノ通り悉ク竹細工ノ事デスカラ尋常ノ大工指物師ノ手デハ出來難イガ當地ニハ未ダ竹細工人ハ居ラヌノデ止ムヲ得ズ少シデモ竹ヲ取扱フノニ慣レテ居ル扇屋ノ職工ダノ傘屋ノ職人ダノヲ集メテ

製造シ初メタ、夫ニ尺ノ目盛ハ轆轤ヲ片手デ使ヒナガラ遣ルノデスカラ片手轆轤ノ使ヘナイモノニハ出来ヌノデスカラ困リマス。然シ斯様ニ困難ヲシテ愈々製造ヲ致シマシタ。

五、製 紙 所

明治六年八月紙匠三名を庄内より募り製紙場を今日の北六條當時の上磯通に設け試みに野桑皮を採つて紙を製したが皮質粗硬で製紙には適しなかつた爲め八年四月楮皮を他縣より購入し紙料に充て又楮苗一萬株を酒田縣より買入れ札幌官園に移植した。開拓使は製紙業に對し相當意を用ひたが明治六年から明治九年迄製紙所に費す所の金額三千百十圓七十七錢に達し其の間の収入金僅かに五百二十二圓三十一錢五厘と云ふ状態であつたので明治十年を以て事業を中止し十一年から紙漉の事を札幌監獄署に移し囚徒をして業に就かしむることとした。製紙に就いて古老深谷鐵三郎の言を次に記すこととしよう。(明治三十三年述)

「北海道ハ雁皮ノ原料ハ澤山アル所デスガ此ノ雁皮ハ書籍ノ様ナモノニ用ヒレバ大層上等ナモノデスガ全ク用ヒ所ノ少イモノデスカラ最初雁皮ノ薄葉計リデシタ之レ計リデハ面白クナイノデ松本判官ガ庄内カラ三名ノ教師ヲ雇ツテ來テ始メタ其ノ時來タ人ハ今東京庵ノ向フ側ニ質屋ヲシテ居ル渡邊末藏及ビ皆川勘兵衛ノ時代デシタカラ同判官ノ手引デ來タノデ其レカラハ雁皮ノミデナイ内地カラ原料ヲモ取寄セ半紙ダノ美濃紙ナドモ漉テ見タ。又北海道産ノ物デハ蝦夷松ノ皮カラ蝦夷松紙、オンコノ皮カラオンコ紙ナド云フノヲ製造シタガ其ノ成績ハ餘リ面白クナカッタ。後ニ紙漉ハ囚人ノ仕事トシテ頻リニ製造ヲシテ今ノ囚人モ遣ツテ居ルガ餘リ上等ノ物ハ却テ面白クナイノデ當

時デハ重ニ半紙ノ漉返シ位ヲ製造シテ居ル様デス。此ノ監獄デ出來ル様ニナツテカラハ岡田佐助ガ始終一手販賣ヲシテ居リマス」

六、製 油 所

明治八年に道産菜種及荳種の消流を圖る目的を以て今日の東一丁目即ち當時の札幌區東創成通回漕庫内に於て搾油を始め明治十一年三月に至り空知通に搾油場を新築し機械屬具を備付けた。

十二年六月作業條例に據り金四千三百三十四圓を營業資本と定め試みに野生胡桃實二石二斗五升を搾り油八升を得た。所が其の味は頗る好かつたにも拘らず外人は之を亞麻仁油と同視し食用に適しないと考へてゐた。其の製法は皮殻を併せて粉末とし麻袋に包み蒸籠に盛り蒸煮し搾油器を以て絞搾したもので實一石より油五升を得たが水氣及び汚物夾雜凡そ百分の一を含み臭氣あり且つ濃色を帯びて居た。故に之を極淡の曹達水にて洗ふ事一回溫所に放任し水氣全く分離するを俟ち紙を以て濾過した。油量は減少するが其色澄明となり甚だ美麗であつた。明治十三年之を東京試薬場に送り試験を乞うた所

「此油ハ比重攝氏十度ニ於テ〇・九三ニシテ其性無毒ナリ但シ適度ニ用フレバ固ヨリ有效無害ナレドモ量ヲ過セバ却ツテ下痢ヲ發ス蓋シコレヲ魚肉漬ニ用フルハ實際困難ナルベシ何トナレバ此油ハ強ク乾燥性ヲ有シ空氣ト接スレバ乾燥シテ固塊形トナルベシ」

と云ふ報告を得た。

次に製油所の成績を示せば左の如くである。

科 目	八 年	九 年	十 年	十 一 年	十 二 年
榨 油 高	一六・〇三五 石	八・九五〇 石	三六・二六 石	五七・五六八 石	四八・六九二 石
金員	三九・五四	四四・三三	九四・〇三	一八三・七五七	三九二・四六三
費	三九・五四	四四・三三	九四・〇三	一八三・七五七	三九二・四六三
經 費	三九・五四	四四・三三	九四・〇三	一八三・七五七	三九二・四六三
作 業 費					改ム

科 目	興 業 費	營 業 費	收 入	營 業 費 損	差 引	興 業 費	營 業 費	還 費	缺 額 補 填
十 二 年	〇	四、七五・七七一 円	四、四〇・一五六 円	〇	一七・二四 円	〇	〇	〇	一七・二四 円

之より見ても製油事業は左程不成績のものではなかつたらしく明治十三年七月建造物、機械等一切を併せ代價千七百八十三圓九十七錢三ヶ年賦上納の約を以て鹿兒島縣士族堀基に拂下げられた。堀基なる人物は本道開發上忘る可からざる存在で我が札幌にも縁故淺からざるものがあるので茲に略傳を掲げて置く。

舊鹿兒島藩士、弘化元年六月鹿兒島城下に生る。明治元年四月箱館裁判所監察を命ぜられ開拓大書記官を経て屯田事務局長となり十八年非職、日本郵船會社創立委員となり成立後其の理事となる。翌十九年北海道廳理事に任じ勸業課長となり二十二年非職、北海道炭礦鐵道株式會社創立に携はり其の社長となる。官に在りては道廳の樞機を掌握し野に下りては本道實業界の牛耳を執り其の勢力並ぶものなく時人呼んで北海道副王と稱せしが廿五年職を罷め貴族院議員に任ぜられ四十三年六十七を以て卒す。

製油業に對する古老深谷鐵三郎（明治三十一年）の談話を次に掲げて本項を終ることとする。

本道デハ元種油ト云フモノハ無カッタノデ魚油ヲ重ニ使用シテ居タ、其魚油モ大體鯨油計リデ有ツタ。尤モ鱈油ハ其時分カラ有リマシタ。明治四年初メテ今ノ北六條ノ篠森泰藏ノ處運送庫ノ脇ノ處へ製造場ヲ設ケテ種油ヲ製造シタ、其原料ノ菜種ハ元カラ北海道ニハ澤山アツタ物デ重ニ野生ノ物デアツタ。尤モ此製造場ガ出來テカラハ植付ケル者モアツタガ是ハ僅少ナモノデ白絞モ此時カラ製造セラレ兩方共ニ諸官吏等ニ拂下ゲニナツタノデス、其後一ケ所デハ到底足りナイ事ニナツタノデ今ノ鐵道線路ニ沿フタ長屋彼レガ油製造所トシテ建築セラレタノデ此所デ以テ盛ンニ製造ヲシタガ其後其製造所ハ堀基サンニ拂下ニナツタノデ北鳴社ト云ツテ是亦以前ニ倍シテ製造シ遂ニ此製造所デモ不足ヲ感ズルト云フノデ自宅ノ脇ヘモ製造所ヲ建築スルト云フ勢デシタガ二ヶ所デハ何カト不便ナノデ前ノ創成川ノ脇ハ止メテ仕舞ヒマシタ、其後明治十三年頃デシタ遠藤五一郎ト云ツテ以前永山將軍ノ從僕ヲ致シテ居ツタ者ガ南一條西三丁目ノ開拓使本廳向ヒノ處へ立派ナ賣捌所ヲ設ケタ、今日デモ札幌ノ油問屋ハ此遠藤一人デ今デハ南一條西二丁目ニ店ガアツテ質素ニ營業ハ致シテ居リマスガ札幌デハ中々ノ大分限者デス、從僕カラ是迄ニナツタ人デ實ニ立派ナ人デス、石油ヲ賣リ初メタノモ矢張り此人デ未ダ大身代ニナラヌ時分デスカラ自身石油ヲ擔イデ歩いて小賣ヲ致シタモノデス、此人ガ石油小賣ノ初メノ人デアリマス。

七、製 皮 所

明治八年八月札幌東創成通に製皮所を設け職工十餘名を傭ひ鞣皮を始めたが機械も整はず且技術未熟の爲め精巧な

製品を得ることが出来なかつた。試みに製品を東京に送り販賣したが價低廉で僅かに費用の幾分を償ふに過ぎなかつたので十一年四月本場を廢止し機械附屬具等は函館製革所に送つた。開業以來費す所の金額四千五百十圓に達したにも拘はらず收入金及函館支廳交付機械代價を合せ僅かに金千七十三圓と云ふ小額であつた。

次に示す古老深谷鐵三郎の言に徴するも明かなる如く官業としての鞣皮業は失敗に了つてゐる。

(明治三十三年述)

此札幌デ種々ノ工業、商業ハ實ニ數多イ事デスガ其ノ重ナルモノハ大抵開拓使時代ニ官デ施設セラレタモノデ人自身デヤツタモノハ極僅少デス、然シ斯ク迄開拓使ガ盡力サレタニモ拘ハラズ茲ニ一ツ如何シテモ成就シナカツタモノガ有マス、隨分ソレハ開拓使デモ金ヲ入レタノデス、夫レハ何かト云フト製革業デス、最初當地ハ御存ジノ通りノ處デ原野ダノ山ダノ計リデ野獸モ澤山居タノデスカラ此野獸ヲ捕獲致シテ製革ヲ致シ又牧場ニモ適當ナ所ガ澤山アルノデスカラ是等ノ場所カラ出來ル諸獸ノ製革ヲ致スモ必要デアルト云フノデ東京カラ製革教師ヲ雇ヒ越シテ北一條東一丁目舊工業局ノ跡デ製造ヲ初メタノデスガ思フ様ニ行カナイノデ廢止ニ致シマシタ、其後市中ノ人民ニテモ此製革事業ヲ計畫致スモノモ何人モアリマシタガ矢張完全ノ結果ヲ得タモノハ一人モ有リマセン、其レ故今日デハ本道ノ諸獸皮ハ生皮ノ儘重ニ京阪地方ヘ輸出致シテ居リマスガ今後ハ一層本道ハ牧畜ガ盛シニナリマセウカラ製革事業ハ最モ必要ナ事ト思ハレマス、此事業ハ本道デ出來ヌ譯デハ無イノデス、現ニ函館ニ一軒川長ト申ス者ガ函館ノ製革所ヲ拂下ゲテ自力ヲ以テ外國カラ教師迄雇ヒ入レ又本道ノ皮丈ケデハ不足ナノデ朝鮮、清國ヨリ皮ヲ取寄セテ製造ヲ致シテ居ル位デス、夫故本道産ノ鷺羽、ワットセノ如キ物ハ今日デハ先ヅ此川長ノ一手占ト云ツテ

ヨイ位デス、故ニ本道ハ製革ニ不適當ト申ス次第デモ有リマスマイ、開拓使デ施計ヲ致シテ成就致サナカツタノハ此一事業計リデス。

八、麥酒醸造所

開拓使次官黒田清隆は今の大日本麥酒會社工場の所に醸造所を設け明治九年九月二十一日から普魯西式製法に則り製造を開始し其の製品を冷製麥酒と稱へた。原料麥は札幌官園及同地方の大麥を用ひたが、概ね外國種子で收穫も多く、而も品位も優秀であつたが十二年當別産大麥粒子に徴を生じた爲更に東京青山試験所に仰いだと云ふ様なこともあつた。又葎花は初めは専ら米國産を用ひたが、當時栽植の外國種葎草が年一年と繁茂し、其の花粉香氣共に外國産に譲らないので漸次之を用ふるに至つた。醸造高は諸設備が整はない爲僅かに十年度百石、十一年度二百石に過ぎなかつたが、十二年六月作業條例に據り八千六百三十六圓を營業資本とし、定額金を以て支辨する財産價格六千四百八十六圓餘を興業費に充てることゝなつて十一月から醸造高を四百石に増し之に伴ふ増築をした。又其の外十二年三月浦鹽斯德に倣ひ高島郡手宮埠頭側に岩窟を鑿ち屈曲して光線の透入を防ぐ設備を爲し麥酒罐詰等の輸出の際一時の貯藏に充てた。當時の麥酒は既に相當優秀であつたものゝ如く十二年に得た獨逸醸造學士「オコルセット」の品評は

「札幌冷製麥酒ハ實ニ良好ニシテ日本醸造ノ麥酒ニシテハ一ノ缺點ナク透明ニシテ沈澱物ナク充分ニ炭酸ヲ含有セリ、余ノ嘗テ味ヒタルモノニ比スレバ大ニ改良スト雖モ其色合ニ於テハ未ダ充分ナラザル所アリ、因テ其改良法ヲ書シテ中川氏「註中川清兵衛ノコト」ニ贈レリ、余曾テ釀ノ煮方及麥酒醱酵等ニ就キ中川氏ニ忠告セシニ同氏善ク余ガ言ヲ用

ヒ麥酒ハ醇良ノ飲料トナリ浸劑ヲ含ム亦百分ノ六四ノ多キニ至レバ久シク酸敗ノ憂ナカルベク此冷製麥酒ハ横濱醸造ノ麥酒ニ勝ルコト遠シ

とあり軍艦比叡ペルシヤ地方回航の際麥酒若干を贈つて置いたのに對し十三年十月に得た報告に依れば「數ヶ月を経るも風味變ぜず」とあり、十四年には第二回勸業博覽會に於て有功賞を得てゐる。其の後漸次需要を増し、十七、十八兩年に於て新に二萬圓を以て五百石増醸に決したが十七年末麥酒に變質物生じ販賣を一時中止した。創業當時は道民の麥酒に對する認識なく技師が飲んで見せても飲む者がなかつたらしく、明治九年九月八日醸造所の落成式を擧げた際の如き「麥とホップを製すれば麥酒と云ふ酒になる」と樽に一字宛書いて宣傳したと云ふことである。同醸造所は十五年廢使置縣の際農商務省工務局の所管に移され、十六年北海道事業管理局に轉じ十九年北海道廳の所管に歸した。以下少しく官業時代に於ける麥酒に關する資料を掲げて參考に資することとする。

從業員數

從業員數は十年七名、十二年十二名であつたが十四年には左表の通り十五名に増加した。因に明治十九年には判任一、技手二、雇一、職工十八、合計二十二名に増加してゐる。(十四年十二月現在)

等級	一	二	三	四	五	六	七	八	九	合	計
人員	三	二	五	一	二	一	一	一	一	一	一五

醸造高

種目	石數		價格
	石數	價格	
九	100,000	2,346,250	2,346,250
十	150,000	3,577,250	3,577,250
十一年	180,810	4,174,730	4,174,730
十二年	169,825	6,793,289	6,793,289
十三年	330,330	1,326,023	1,326,023
自十四年七月 至十五年二月八日	108,000	3,915,000	3,915,000

收支狀況

科目	九		十		十一年		十二年		十三年		十四		十五年	
	九	十	十	十一年	十一年	十二年	十二年	十三年	十三年	十四	十四	十五年	十五年	
興業費	0	9,330,555	0	14,448,216	0	13,630,364	0	13,630,364	0	23,400,099	0	23,400,099	0	23,400,099
營業費	0	9,326,845	0	13,630,364	0	13,630,364	0	13,630,364	0	23,400,099	0	23,400,099	0	23,400,099
營業費ト差引	0	35,792	0	35,792	0	35,792	0	35,792	0	35,792	0	35,792	0	35,792
損益	0	35,792	0	35,792	0	35,792	0	35,792	0	35,792	0	35,792	0	35,792
興業費	0	9,330,555	0	14,448,216	0	13,630,364	0	13,630,364	0	23,400,099	0	23,400,099	0	23,400,099
營業費	0	9,326,845	0	13,630,364	0	13,630,364	0	13,630,364	0	23,400,099	0	23,400,099	0	23,400,099
營業費ト差引	0	35,792	0	35,792	0	35,792	0	35,792	0	35,792	0	35,792	0	35,792
損益	0	35,792	0	35,792	0	35,792	0	35,792	0	35,792	0	35,792	0	35,792
職工需用費	1,266,033	1,867,733	1,338,636	2,443,340	1,461,500	6,677,750	4,571,590	3,172,333	997,375	1,594,164	5,962,971	3,172,333	997,375	1,594,164
職工計費	1,266,033	1,867,733	1,338,636	2,443,340	1,461,500	6,677,750	4,571,590	3,172,333	997,375	1,594,164	5,962,971	3,172,333	997,375	1,594,164
興業費	0	9,330,555	0	14,448,216	0	13,630,364	0	13,630,364	0	23,400,099	0	23,400,099	0	23,400,099
營業費	0	9,326,845	0	13,630,364	0	13,630,364	0	13,630,364	0	23,400,099	0	23,400,099	0	23,400,099
營業費ト差引	0	35,792	0	35,792	0	35,792	0	35,792	0	35,792	0	35,792	0	35,792
損益	0	35,792	0	35,792	0	35,792	0	35,792	0	35,792	0	35,792	0	35,792
興業費	0	9,330,555	0	14,448,216	0	13,630,364	0	13,630,364	0	23,400,099	0	23,400,099	0	23,400,099
營業費	0	9,326,845	0	13,630,364	0	13,630,364	0	13,630,364	0	23,400,099	0	23,400,099	0	23,400,099
營業費ト差引	0	35,792	0	35,792	0	35,792	0	35,792	0	35,792	0	35,792	0	35,792
損益	0	35,792	0	35,792	0	35,792	0	35,792	0	35,792	0	35,792	0	35,792
興業費	0	9,330,555	0	14,448,216	0	13,630,364	0	13,630,364	0	23,400,099	0	23,400,099	0	23,400,099
營業費	0	9,326,845	0	13,630,364	0	13,630,364	0	13,630,364	0	23,400,099	0	23,400,099	0	23,400,099
營業費ト差引	0	35,792	0	35,792	0	35,792	0	35,792	0	35,792	0	35,792	0	35,792
損益	0	35,792	0	35,792	0	35,792	0	35,792	0	35,792	0	35,792	0	35,792
興業費	0	9,330,555	0	14,448,216	0	13,630,364	0	13,630,364	0	23,400,099	0	23,400,099	0	23,400,099
營業費	0	9,326,845	0	13,630,364	0	13,630,364	0	13,630,364	0	23,400,099	0	23,400,099	0	23,400,099
營業費ト差引	0	35,792	0	35,792	0	35,792	0	35,792	0	35,792	0	35,792	0	35,792
損益	0	35,792	0	35,792	0	35,792	0	35,792	0	35,792	0	35,792	0	35,792
興業費	0	9,330,555	0	14,448,216	0	13,630,364	0	13,630,364	0	23,400,099	0	23,400,099	0	23,400,099
營業費	0	9,326,845	0	13,630,364	0	13,630,364	0	13,630,364	0	23,400,099	0	23,400,099	0	23,400,099
營業費ト差引	0	35,792	0	35,792	0	35,792	0	35,792	0	35,792	0	35,792	0	35,792
損益	0	35,792	0	35,792	0	35,792	0	35,792	0	35,792	0	35,792	0	35,792
興業費	0	9,330,555	0	14,448,216	0	13,630,364	0	13,630,364	0	23,400,099	0	23,400,099	0	23,400,099
營業費	0	9,326,845	0	13,630,364	0	13,630,364	0	13,630,364	0	23,400,099	0	23,400,099	0	23,400,099
營業費ト差引	0	35,792	0	35,792	0	35,792	0	35,792	0	35,792	0	35,792	0	35,792
損益	0	35,792	0	35,792	0	35,792	0	35,792	0	35,792	0	35,792	0	35,792
興業費	0	9,330,555	0	14,448,216	0	13,630,364	0	13,630,364	0	23,400,099	0	23,400,099	0	23,400,099
營業費	0	9,326,845	0	13,630,364	0	13,630,364	0	13,630,364	0	23,400,099	0	23,400,099	0	23,400,099
營業費ト差引	0	35,792	0	35,792	0	35,792	0	35,792	0	35,792	0	35,792	0	35,792
損益	0	35,792	0	35,792	0	35,792	0	35,792	0	35,792	0	35,792	0	35,792
興業費	0	9,330,555	0	14,448,216	0	13,630,364	0	13,630,364	0	23,400,099	0	23,400,099	0	23,400,099
營業費	0	9,326,845	0	13,630,364	0	13,630,364	0	13,630,364	0	23,400,099	0	23,400,099	0	23,400,099
營業費ト差引	0	35,792	0	35,792	0	35,792	0	35,792	0	35,792	0	35,792	0	35,792
損益	0	35,792	0	35,792	0	35,792	0	35,792	0	35,792	0	35,792	0	35,792
興業費	0	9,330,555	0	14,448,216	0	13,630,364	0	13,630,364	0	23,400,099	0	23,400,099	0	23,400,099
營業費	0	9,326,845	0	13,630,364	0	13,630,364	0	13,630,364	0	23,400,099	0	23,400,099	0	23,400,099
營業費ト差引	0	35,792	0	35,792	0	35,792	0	35,792	0	35,792	0	35,792	0	35,792
損益	0	35,792	0	35,792	0	35,792	0	35,792	0	35,792	0	35,792	0	35,792
興業費	0	9,330,555	0	14,448,216	0	13,630,364	0	13,630,364	0	23,400,099	0	23,400,099	0	23,400,099
營業費	0	9,326,845	0	13,630,364	0	13,630,364	0	13,630,364	0	23,400,099	0	23,400,099	0	23,400,099
營業費ト差引	0	35,792	0	35,792	0	35,792	0	35,792	0	35,792	0	35,792	0	35,792
損益	0	35,792	0	35,792	0	35,792	0	35,792	0	35,792	0	35,792	0	35,792
興業費	0	9,330,555	0	14,448,216	0	13,630,364	0	13,630,364	0	23,400,099	0	23,400,099	0	23,400,099
營業費	0	9,326,845	0	13,630,364	0	13,630,364	0	13,630,364	0	23,400,099	0	23,400,099	0	23,400,099
營業費ト差引	0	35,792	0	35,792	0	35,792	0	35,792	0	35,792	0	35,792	0	35,792
損益	0	35,792	0	35,792	0	35,792	0	35,792	0	35,792	0	35,792	0	35,792
興業費	0	9,330,555	0	14,448,216	0	13,630,364	0	13,630,364	0	23,400,099	0	23,400,099	0	23,400,099
營業費	0	9,326,845	0	13,630,364	0	13,630,364	0	13,630,364	0	23,400,099	0	23,400,099	0	23,400,099
營業費ト差引	0	35,792	0	35,792	0	35,792	0	35,792	0	35,792	0	35,792	0	35,792
損益	0	35,792	0	35,792	0	35,792	0	35,792	0	35,792	0	35,792	0	35,792
興業費	0	9,330,555	0	14,448,216	0	13,630,364	0	13,630,364	0	23,400,099	0	23,400,099	0	23,400,099
營業費	0	9,326,845	0	13,630,364	0	13,630,364	0	13,630,364	0	23,400,099	0	23,400,099	0	23,400,099
營業費ト差引	0	35,792	0	35,792	0	35,792	0	35,792	0	35,792	0	35,792	0	35,792
損益	0	35,792	0	35,792	0	35,792	0	35,792	0	35,792	0	35,792	0	35,792
興業費	0	9,330,555	0	14,448,216	0	13,630,364	0	13,630,364	0	23,400,099	0	23,400,099	0	23,400,099
營業費	0	9,326,845	0	13,630,364	0	13,630,364	0	13,630,364	0	23,400,099	0	23,400,099	0	23,400,099
營業費ト差引	0	35,792	0	35,792	0	35,792	0	35,792	0	35,792	0	35,792	0	35,792
損益	0	35,792	0	35,792	0	35,792	0	35,792						

第三條 現在ノ麥酒及原料品代價ハ追テ正算金額指示ノ日ヨリ三十日以内ニ完納スベシ

第四條 麥酒醸造改良ノ爲メ外國ヨリ醸造師一名雇入方照會中ニ付別紙(之ヲ略ス)條約大要ニ據リ三ヶ年間當廳雇トシテ其事業ニ從事セシムベシ尤モ往復旅費及一ヶ年分ノ給料ハ特別保護ノ爲メ當廳ヨリ支給ス、爾後二ヶ年間給料雜費ハ都テ拂受人ニ於テ負擔スベシ

第五條 醸造改良ノ爲メ工場模様替若クハ機械新調等ニ要スル費用ハ總テ拂受人ノ自辨タルベシ

第六條 麥酒醸造場ハ當道農産消流ノ目的ヲ以テ設置セシ工場ナルガ故其醸造原料大麥ハ可成當地方産ノモノヲ用ヒ毎年醸造高ハ七百石ヲ減ズベカラズ

第七條 原料大麥買入値段ハ該年東京、大阪、宮城ノ三ヶ所平均相場ヲ以テ低減スベカラズ

第八條 第一條ノ金額完納ニ至ル迄ハ臨時監査員ヲ派遣シ事業實況及抵當現品ヲ調査セシムル事アルベシ

但シ工場ノ會計ニ屬スル帳簿ハ別ニ設置キ臨時監査ノ便ニ供スベシ

第九條 第一條ノ金額完納ニ至ル迄工場模様替ハ其時々當廳ノ許可ヲ受クベシ

第十條 此ノ命令ニ違背スルトキハ詮議ノ上拂下ヲ取消スベシ其節拂下品紛失破損等ヲ生ゼシ分ハ其代價又ハ修繕費ヲ辨償セシムルハ勿論既ニ上納シタル年賦金ハ一切之ヲ下戻サマルモノトス

次に麥酒に關し明治三十三年頃述べてゐる古老深谷鐵三郎の談話を掲げる。

「麥酒ノ製造ヲ最初ニ遣ツタノハ矢張開拓使デ今ノ麥酒會社ノ在ル所デスガ今ノ様ナ立派ナ建物デハナカッタ。教師ハ今小樽ニ居ル中川清兵衛サンガ洋行シテ歸ツタ許リデ有ツタノデ此ノ人ヲ教師ニシテ製造ヲ始メタノデス、

其後此製造所ヲ拂下ゲノ事ニ決シテ前ノ關係カラ拂下人ハ中川サンニ決シテ居タノデスガ中川ト云フ人ハ極慾ノナイ人ナノデ斯様ナモノヲ貫ツテモ仕方ガナイト云フテ辭シタノデ大倉組ヘ拂下グル事ニナツテ大倉組デハ以前ニ増シテ盛ンニ製造ヲシタガ或年製造ノ麥酒ガ非常ニ不出來デ全ク賣レナイ事ニナツタノデ種々ノ方法ヲ以テ他ノ名義ナドデ極安ニ賣捌イタ事ナドモ有ツタ、其ノ時分ハラガ麥酒ト云フ名稱デアツタ、其ノ後土田政次郎サンガ支配人ニナツテカラ大層盛大ニナツタ、其ノ後今ノ株式會社ニナリ今日ノ如ク札幌ノ一名産ニナツタノデス、是等ノ拂下モ僅カナ金デ以テ諸機械カラ醸造ノ麥酒マデ一所ニ拂下ゲタノデス」

九、葡萄酒醸造所

明治九年九月麥酒醸造所の一部に於て野生葡萄を以て葡萄酒八石餘を試醸した。其の味は培養葡萄より製したものは劣る如くであつたが往々之を嗜む者もあつた。斯くて十年に至り札幌官園栽植の米國種葡萄漸く結實を見たので製造所を札幌通りに新設し、之を葡萄酒製造所と稱へ、佛國醸造法に倣ひ製造に着手し優良品を得るに至つた。一方十一年九月試みに野生葡萄、覆盆子、獼猴桃等の液汁を以て穀酒、焼酎、葡蘭地等各小量を製したが何れも品位米國製に譲らず、就中葡蘭地は頗る聲價を得た。又米或は小麦を原料として焼酎をも製造した。本場は十二年六月作業條例により七百七十圓を資本とし定額を以て支辨する所の家屋器械價格二千八百七十五圓七十七錢二厘を興業費に充て十三年に至り別に興業費に二百九十一圓六錢七厘を以て蒸溜所一棟を建築し、同年六月營業資本一千二百六圓を増し一千九百七十六圓とし、更に十四年千九百九十三圓八十五錢四厘を以て酒庫、桶等を造つた。豫ねて米國種葡萄より

獨逸種の優ることを認め、獨國種苗を接木栽培してゐたが、之が年々増加して十五年頃には其の數六萬四千六百三十九本に達した。然るに十五年の醸造は酸味強く飲用に適しなかつた爲に原料並に醸造法の改善を計り、別に佛國種を移植した。十八年は葡萄結實良好で六十石を醸造した。以下本場に關する資料を掲げることとする。

從業員

從業員數は十年六名、十一年一名、十五年十五名、十九年十五名であつた。猶十九年に於ける從業員の内譯は技手一、技生一、職工十三であつた。

醸造高

種	目	九年		十年		十一年		十二年		十三年		自十四年七月 至十五年二月八日
		數量	金員	數量	金員	數量	金員	數量	金員	數量	金員	
葡萄	數量	二・〇〇〇	八三・四五三	三五・〇〇〇	一・七三・八三三	〇	〇	六・一九〇	二八・〇〇〇	一・五〇〇・三三九	六・六九・二〇〇	六・二九二
	金員	六・〇〇〇	二、四六七・三五五	〇	〇	二・一三五	四〇一・一五九	五・七三三	七五一・九五四	四・六〇〇	七四一・〇九九	六・七・四〇
火酒	數量	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇
	金員	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇
合計		二、二八九・八〇七	一、七三・八三三	四〇一・一五九	一、〇四八・九六六	二、二八一・四三六	六・六九六・三四〇					

收支狀況

科	目	九年	十年	十一年	十三年	一
職工需用費		八〇〇・三五〇	一、〇六〇・二九〇	三、二八九・八〇七	三五四・七八〇	五五・三〇九
合計		一、四三九・六六七	二、六四・五三三	二、四一・八三三	二、四一・八三三	二、四一・八三三

財產狀況

科	目	十年		十一年		十二年		十三年		十四年	
		金額	補填	金額	補填	金額	補填	金額	補填	金額	補填
興業費	興業費	〇	〇	二九一・〇六七	〇	一、八四四・六八一	〇	九、一九八・〇九三	〇	四、六五四・〇六三	〇
	營業費	〇	〇	七三三・五五六	〇	一、八四四・六八一	〇	四、六五四・〇六三	〇	四、五四四・〇三〇	〇
營業費ト差引損益	損益	〇	〇	二〇一・六五三	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇
	還興業費	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇
收營業費	營業費	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇
	營業費	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇
價額	價額	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇
	補填	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇
合計	合計	〇	〇	二、九一・六五三	〇	三、六八八・二六四	〇	四、五四四・〇三〇	〇	四、五四四・〇三〇	〇
	合計	〇	〇	二、九一・六五三	〇	三、六八八・二六四	〇	四、五四四・〇三〇	〇	四、五四四・〇三〇	〇

財產	價	種	價
筒所棟數及	〇棟	〇棟	〇棟
建坪及地坪	一、九三二・五〇〇	七三三・七〇〇	二、九一・六五三
價格	四九八・〇三三	一、四九四・九四六	二、九一・六五三
醸造場	一棟	一棟	一棟
蒸溜場	一棟	一棟	一棟
物置	一棟	一棟	一棟
穴庫	一棟	一棟	一棟
職夫住居	一棟	一棟	一棟
諸機械	一六三種	一六三種	一六三種
合計	一六三種	一六三種	一六三種

M

經費及製造高 (明治十九年)

科 目	金 員	製 造 品 名	數 量	代 價	販 賣 品 名	數 量	代 價
俸 給	四九三・〇〇〇 ^円	葡 萄 酒	一 百 一 十 一 瓶	二四三・六〇〇 ^円	葡 萄 酒	一 百 一 十 一 瓶	二四三・六〇〇 ^円
諸 給	一、五八六・一八八	上 等 武 蘭 地	五 十 十 一 石	二七〇・〇〇〇	上 等 武 蘭 地	五 十 十 一 石	二七〇・〇〇〇
廠 費	二八・九三五	下 等 同	七 石	二〇三・〇〇〇	下 等 同	七 石	二〇三・〇〇〇
農 工 事 業 費	四六三・〇〇〇						
營 繕 費	二四〇・三七四						
總 計	三、〇六四・四九七			七二五・六〇〇			七二五・六〇〇

本表中醸造額ノ少ナキハ醸造季節ニ際シ事業ヲ委託セシニ由ル。
斯くして本場は十九年九月事業一切を山口縣士族桂二郎に委託經營せしむることゝなつた。其の命令書は次の通りである。

命 令 書

山口縣長門國阿武郡川島村士族
桂 二 郎

今般當廳所管葡萄酒釀造場委託候ニ付心得方左ノ如シ

第一條 石狩國札幌區北三條ニ設置スル葡萄酒釀造場及ビ附屬ノ土地建物器具等都テ有形ノ儘貸與シ該場事業ヲ委

托ス依テハ葡萄酒栽培及釀造目的ヲ維持スルヲ要ス

第二條 委託期限ハ明治十九年九月ヨリ同二十三年三月迄滿三年七ヶ月トス

第三條 委託期限中經費トシテ左ノ金額ヲ下附スベシ尤第十二條ノ場合ニ於テハ其年分ニ限り委託ヲ解キタル日ニ

テ日割ヲ以テ下附スルモノトス

但シ毎期請取方會計課へ申出ベシ

一金三千五百七拾圓

明治十九年九月下附

内

金貳千五百圓

明治十九年九月下附

金千七拾圓

明治二十年一月下附

一金三千六百六拾圓

明治二十年度下附ノ分

内

金千百圓

明治二十年四月下附

金千百圓

明治二十年七月下附

金八百圓

明治二十年十月下附

金六百六拾圓

明治二十一年一月下附

一金貳千八百四拾圓

明治二十一年度下附ノ分

内

- 金七百五十圓 明治二十一年四月下附
- 金七百五十圓 明治二十一年七月下附
- 金七百五十圓 明治二十一年十月下附
- 金五百九十圓 明治二十二年一月下附

- 第四條 葡萄酒ハ各種類ヲ區別シ栽培ヲ精密ニシ種苗ノ改良繁殖ヲ計ルベシ
- 第五條 醸造方法ハ一層之ヲ研究シ極メテ良品ヲ製造シ聲價ヲ博スル様注意スベシ
- 第六條 建物器具等保存方別ヲ注意シ其修繕補足ハ自辨タルベシ
- 第七條 貸與器具等ノ内事業ノ都合ニ依リ不用ニ屬スルトキハ之ヲ納付スル事ヲ得
- 第八條 地形ヲ乘換シ又ハ建物ヲ移轉若クハ模様替ヲナサント欲スルトキハ許可ヲ請フベシ
- 第九條 葡萄ノ栽培及醸造方法傳習ヲ請フモノアルトキハ懇切ニ之ヲ教授スベシ
- 第十條 葡萄苗ノ拂下ヲ請フモノアルトキハ相當ノ代價ヲ以テ賣却スル事ヲ得
但シ賣却代價ハ豫メ届出ベシ
- 第十一條 釀酒賣却價格其他事業ノ成績ハ毎年十二月中詳細届出ベシ
- 第十二條 委托期限中ト雖モ此命令ニ違背スルカ又ハ不都合ノ廉アリト認ムルトキハ委托ヲ解ク事アルベシ此場合ニ於テハ過渡ノ經費金及土地建物器具共都テ委托ヲ解キタル日ヨリ三十日以内ニ返納セシムベシ

但シ自費ヲ以テ新規上施設セシ物件ハ委托ヲ解キタル日ヨリ三十日以内ニ取除クベシ

第十三條 商標ハ當分従前ノモノヲ使用スベシ

第十四條 葡萄苗實及ビ釀酒賣却ノ代金ハ都テ被托者ニ於テ收入シ事業ノ經費ニ充ツベシ

右各條遵守可致事

明治十九年八月二十四日

十、醤油、味噌醸造所

醤油及味噌の製造は開拓使の手に依つて明治四年から營まれてゐるが札幌に於て經營せられたのは明治十年からである。即ち明治九年札幌近傍に於て收穫の豆麥を買上げ味噌、醤油の醸造準備に着手し、翌十年一月醤油醸造所を札幌區空知通今日の北六條に、味噌製造所を同區厚田通今日の北二條に建築し製造を開始した。併し兩製造所共十一年九月設備一切、並に仕込品を併せ一萬五千五百九十三圓十五錢四厘、五ヶ年賦上納の約を以て青森縣士族對馬嘉三郎外一名に賣下げた。拂下前の従業員は醤油醸造所、味噌製造所共に五名であり、此間に於ける製造高及經費は次表の通りであつた。

製造高及經費

科	日	年	十	年	十	一	年
味噌	數量	10,000,000	110,000,000	3,750,000	8,880,000	1,484,579	
金額		11,010,000	3,750,000				

醬	油		醬
	金	數量	
計	員	員	費
二、〇一五、〇〇〇	〇	〇	一、八六〇、三〇九
三、〇〇〇、〇〇〇	〇	〇	五、三三三、九八二
一三、九七六、二四〇	〇	〇	一、七九四、二六一
一七、七八八、二四〇	〇	〇	五三三、二四三
三七、七〇〇	〇	〇	
三〇、九、七〇一	〇	〇	

四〇

前記兩場は初め對馬嘉三郎等の組織した興成社に於て經營し製品は開拓使當時の商標別製福壽印一等、菊印外、松竹、梅の印を用ひてゐたが其の後對馬嘉三郎個人の所有に歸した。對馬嘉三郎に就いては拂下當時香しからざる噂もあつたが、札幌に貢獻した功績は没す可らざるものあり、後年札幌商業會議所初代の會頭に推されてゐるので其の略傳を掲げることとする。

對馬嘉三郎は天保七年十一月津輕弘前代官町、津輕藩士の家生まれ明治四年七月青森縣に出仕し、翌五年四月開拓使十一等出仕に補せられ、同年十一月開拓使中主典に進み、十一年七月官を退き、爾來醬油、製酒等各種の事業に従事し十九年札幌區總代人となり、三十二年札幌區に自治制布かるゝや翌年一月初期區長に當選、三十六年三月衆議院議員に當選、四十年三月札幌商業會議所の設立せらるゝや議員に當選し初期會頭に擧げられ、四十三年會頭を辭して特別議員に選ばれるゝ等幾多の公職に就き、札幌の元老として各方面に重きを爲せしが、四十五年去りて東京に住し、大正五年逝去す。

前記製造所の拂下げと前後して開拓使に於て更に札幌に於ける第二の味噌、醬油製造所の計畫あり、十二年六月札幌區東創成町、今日の東一丁目に之が建設を見た。本場は醬油、味噌の外酢の製造にも當り、幌内炭山の需要を主と

し、併せて一般にも賣下げた。即ち家屋器械等の經費は十一年度に於ては定額三千四百九十九圓六十錢四厘を以て支辨し、十二年から改めて興業費に充て營業資本九千六百六十三圓とした。更に十三年に至り興業費千二百九十三圓九十五錢を以て杜氏居宅及物置庫を増築し十四年下總野田から職工を招いて品質の改善を計つた。本場も亦十七年五月拂下に決し水原寅藏其の他拂下運動者があつたが十八年六月對馬嘉三郎に三ヶ年賦を以て拂下げられた。

拂下げ前に於ける従業員數、製造高、收支狀況、財産等次の如くであつた。

従業員數

(十五年一月現在)

種	日	杜	氏	職	職					合	計
					三	等一	等四	等五	等		
人	員	一	一	一	一	五	一	一	九		

製造高

種	日	年	十		三		年		自十四年一月八日	至十五年一月八日
			金	數量	金	數量	金	數量		
醬	油	三、八三六、〇〇〇	三、八三六、〇〇〇	石	五、七八三、〇〇〇	石	一、七二六、〇〇〇	石	一、七二六、〇〇〇	石
			三、八三六、〇〇〇	員	五、七八三、〇〇〇	員	一、七二六、〇〇〇	員	一、七二六、〇〇〇	員
酢	味噌	三、八三六、〇〇〇	三、八三六、〇〇〇	石	五、七八三、〇〇〇	石	一、七二六、〇〇〇	石	一、七二六、〇〇〇	石
			三、八三六、〇〇〇	員	五、七八三、〇〇〇	員	一、七二六、〇〇〇	員	一、七二六、〇〇〇	員
味	噌	三、八三六、〇〇〇	三、八三六、〇〇〇	石	五、七八三、〇〇〇	石	一、七二六、〇〇〇	石	一、七二六、〇〇〇	石
			三、八三六、〇〇〇	員	五、七八三、〇〇〇	員	一、七二六、〇〇〇	員	一、七二六、〇〇〇	員
			四、六九四、〇五〇	員	七、七四二、二八〇	員	七、七四二、二八〇	員	七、七四二、二八〇	員

四一

合 計 金 員	興 業 費	營 業 費	收 入	營 業 費 下 差 引 損 益	償 還 費	欠 額
九、〇三、〇四〇	八、二九、六六八	一、〇九、〇九〇	一、〇九、〇九〇	一、〇九、〇九〇	〇	〇
一三、六九六、二八〇	二、六九二、七〇七	一、二九三、九五〇	八、一九八、〇九一	八、一九八、〇九一	〇	〇
八、八三八、四六八	九、五五一、五五六	一、二九三、九五〇	三、四、九七一、三〇五	三、四、九七一、三〇五	〇	〇
			三、四、一四九、五八二	三、四、一四九、五八二	〇	〇
			八二一、七二三	八二一、七二三	〇	〇
			八二一、七二三	八二一、七二三	〇	〇
			八二一、七二三	八二一、七二三	〇	〇

財産状況

表 産 財	科 目	敷 地	製 造 所	穀 物 庫	社 氏 住 宅	酢 藏	職 夫 舍	住 取 締 宅 人	庫 番 居 住	機 械	合 計
價 格	種 類	〇 棟	二 棟	二 棟	一 棟	一 棟	一 棟	一 棟	一 棟	〇 棟	九 棟
七、七二、五〇〇	建坪及地坪	二、八五〇坪	二、九二〇坪	一、二五〇坪	一、八〇坪	一、八〇坪	一、〇〇坪	七五坪	八〇坪	三九坪	〇坪
三、五〇〇		三、五〇〇	三、五〇〇	二、五〇〇	三、七〇	四、七五、七〇〇	二、〇〇、四〇〇	一、五七、八〇〇	七、三三〇	二、七六、七〇九	九、六五三、六六三

猶終りに明治四年七月札幌郡篠路村に設置せられた醤油醸造所に付其の概要を掲げることとする。

此の製造所の出来る迄醤油は内地（主として越後）から来てをり、而も上等品と云つても越後白根の溜であつた。本場に於ては原料豆麥は篠路附近のものも用ひたが、大部分は内地に仰いでゐた。製品は松、竹、梅印の三種で外に特製菊印、福壽印を出してゐた。

本場は十一年設備一切を五千七百七十三圓六十四錢五厘、四ヶ年賦を以て宮城縣士族澤口永將に拂下げられた。併し澤口は經營に誠意なく開拓使に迷惑を及したので、十二年に至り樺戸月形村の集治監に讓渡した。集治監では囚人をして製造に當らしめ角一、角二、角三の商標を附して製品を賣つてゐた。此の製品の一手販賣人は樺戸集治監御用達を勤めてゐた南二條の山角であつたが、樺戸と篠路は相當遠隔で監督上差障があつた爲、後越後出身笠原文平（後に格一と改名）に拂下げた。

澤口永將に拂下ぐる迄の製造高及經費は次の如くであつた。

製造高及經費

科 目	自 至	製造高	經費
製造高	四年六月	數量	四六五、四〇〇石
		金額	二、三九〇、四〇四
八 年 度	八 年 度	數量	四三八、八〇〇石
		金額	三、九四六、六六三
九 年 度	九 年 度	數量	二五五、〇〇〇石
		金額	二、五五九、三三八
十 年 度	十 年 度	數量	二五五、〇〇〇石
		金額	一、八五一、六一一
十 一 年 度	十 一 年 度	數量	四九、〇〇〇石
		金額	二、五六、三〇〇
總計		製造高	一、〇六八、〇〇〇石
		經費	二、三九〇、四〇四

十一、製粉所

製粉の事業は明治六年二月水車機械所に粉磨機械を装置し麥粉の製造を試みたに始つてゐる。同年十二月麥粉二十樽を開拓使東京出張所に送り試みに麵麩を製した。其の結果に就いては明でないが、其の後明治九年七月東創成町に蒸氣粉挽機械所を建築し十二馬力蒸氣機關を備へ、從來の水力に代ふるに蒸氣力を以てした。初め原料小麥を擇ばなかつた爲め品質粗悪で麵麩に適しなかつたので、西洋種麥赤白二種を撰び用ひた。其の後風土に適する小麥種子に付研究を重ねた結果米國種赤皮白小麥が最も好いことが判り、十二年以後之が收穫に力を注いだ。當時在來の麥は豊年でも一段歩一石以上の收穫は稀であつた。

米國赤白兩種を同等の地味に同一の肥料を施して耕作した二ケ年間の一段歩收穫は次表の如くであつた。

收穫高

種 類	十 年		二 年	
	赤 小 麥	赤 皮 白 小 麥	赤 小 麥	赤 皮 白 小 麥
收 穫	〇・五九三石	一・八四四石	一・三〇〇石	二・三三〇石

當時米國東部諸州に於ては専ら赤麥を耕作し赤皮白麥を播くものは寡かつたが、本道は赤皮白麥が最も地味に適し收穫も多く加ふるに色味共に優れ、製粉成績亦他種の比ではなかつた。即ち他の品種と粉量を比較した成績は次表の通りである。

(麥四斗に對する明治十二年の調査)

製粉	一 二 三 合 粉 粉 一	番 番 番 計 色 味 升	英 斤	土產米國種赤皮白麥		土產米國種赤麥		東京產米國種白麥		土產和種上等麥	
				價 斤	價 斤	價 斤	價 斤	價 斤	價 斤		
滋 純	五五・三強	四二・九強	四・〇〇斤	二・八九三	二・八五五	二・八五五	三〇・〇〇	三〇・〇〇	五〇・〇〇	一・九四九	
味 白	二二・〇六強	二六・九三強	二・五〇斤	二・八九三	二・八五五	二・八五五	三〇・〇〇	三〇・〇〇	一三・〇〇	七六・一	
滋 味	二五・五三強	二六・六七	二・五〇斤	二・八九三	二・八五五	二・八五五	三〇・〇〇	三〇・〇〇	一一・五〇	五〇・五	
合 計	三〇・〇〇	二八・四〇	二・五〇斤	二・八九三	二・八五五	二・八五五	三〇・〇〇	三〇・〇〇	二七・〇〇	四三・五	
粉 色	一三・三三強	一四・九三強	一・四・九三強	二・八九三	二・八五五	二・八五五	三〇・〇〇	三〇・〇〇	一〇〇・五〇	五〇・五	
粉 味	三・六七七	二・八九三	二・八九三	二・八九三	二・八五五	二・八五五	三〇・〇〇	三〇・〇〇	二・八七九	四三・五	
一 升 量 目	三六・七・五	三五・七・〇	三五・七・〇	三五・七・〇	三五・七・〇	三五・七・〇	三五・七・〇	三五・七・〇	三五・七・〇	五八・五	

(麥八斗に對する明治十四年の調査)

種 類	一 二 三 粉 粉 一	番 番 番 製 段 步 收 穫	斤	赤 皮 白 小 麥		新 種 白 小 麥		赤 小 麥		チ ク チ ク 種 白 小 麥	
				價 斤	價 斤	價 斤	價 斤	價 斤	價 斤		
滋 純	五五・三強	四二・九強	四・〇〇斤	二・八九三	二・八五五	二・八五五	三〇・〇〇	三〇・〇〇	五〇・〇〇	一・九四九	
味 白	二二・〇六強	二六・九三強	二・五〇斤	二・八九三	二・八五五	二・八五五	三〇・〇〇	三〇・〇〇	一三・〇〇	七六・一	
滋 味	二五・五三強	二六・六七	二・五〇斤	二・八九三	二・八五五	二・八五五	三〇・〇〇	三〇・〇〇	一一・五〇	五〇・五	
合 計	三〇・〇〇	二八・四〇	二・五〇斤	二・八九三	二・八五五	二・八五五	三〇・〇〇	三〇・〇〇	二七・〇〇	四三・五	
粉 色	一三・三三強	一四・九三強	一・四・九三強	二・八九三	二・八五五	二・八五五	三〇・〇〇	三〇・〇〇	一〇〇・五〇	五〇・五	
粉 味	三・六七七	二・八九三	二・八九三	二・八九三	二・八五五	二・八五五	三〇・〇〇	三〇・〇〇	二・八七九	四三・五	
一 升 量 目	三六・七・五	三五・七・〇	三五・七・〇	三五・七・〇	三五・七・〇	三五・七・〇	三五・七・〇	三五・七・〇	三五・七・〇	五八・五	

一升量目	粉味	粉色	合計
			價斤
	美	白	
	三七・五〇		二七・五
			七・二九五
	美	白	
	三七・五〇		一〇七・五
			七・一八〇
	美	白色赤小麦ニ及バズ	
	三七・〇〇		一〇一・五
			六・五五七
	味赤小麦ニ及バズ	同上	
	三五・五〇		二二〇・六
			七・二三五

前述の如く原料麥に對しては相當意を用ひたものゝ如く、十三年に得た横濱駐在外商「レーンクロウフアルド」社の麵粉に對する品評は成績優秀であつたことを認めてゐる。
 従業員は極めて少數であつたが、製粉量は十年に八万四千八百五十餘斤、十一年に十九万六千九百餘斤であつて、當時としては相當の量であつたらしい。

十二年に至り従來開拓使定額支辨の財産價格二千六百九十八圓六十錢三厘を興業費に充て、三千五百五十六圓を營業資本と定められた。

斯くて十三年一個の機械を裝置し麩を篩分けの設備をしたが、併し猶原動力に餘裕があつた爲更に玉蜀黍磨碎機を裝置した。又十八年には擴張費五万餘圓を支出し米國より蒸氣原動機を購入し、米人を傭入れた。十五年一月に於ける従業員は職夫四等一名、七等二名であつた。

次に本製粉場に關する若干の資料を掲げることとする。
 生産 高

種目	十一年		十二年		十三年		自十四年七月 至十五年二月二日
	價斤	價斤	價斤	價斤	價斤	價斤	
一番粉	三九、二八一・〇〇	七八、五六九・五〇	九三、一〇〇・〇〇	一〇四、七六三・五〇	三七、三〇〇・〇〇		三九、二八一・〇〇
二番粉	八、七五二・〇〇	一七、五六六・〇〇	一八、〇〇〇・〇〇	六、四四二・〇五	二、一七四・〇〇		八、七五二・〇〇
三番粉	一四、〇三三・〇〇	一七、九二二・〇〇	一八、〇〇〇・〇〇	六、四四二・〇五	二、一七四・〇〇		一四、〇三三・〇〇
四番粉	一、七四六・〇〇	一、五二八・〇〇	一、一〇〇・〇〇	一〇〇・〇〇	一〇〇・〇〇		一、七四六・〇〇
麩	三五、四五九・五〇	七〇、九九三・三〇	四九、七六〇・〇〇	四三、三三九・〇〇	一三、四三三・三〇		三五、四五九・五〇
玉蜀黍	〇	六、二九五・四六	四四、六九七	七七九・九三	二四一、八三五		〇
合計	八四、八五八・五〇	一九六、九四四・二六	一六五、〇六二・〇〇	一六五、〇二二・五〇	五六、九五・三〇		八四、八五八・五〇
費	一、三六九・七三九	二、八〇三・四三二	五、〇三三・五〇七	七、七七七・一七五	二、六〇四・〇三五		一、三六九・七三九
職工費	四四一・六七八	八七一・六八六	五〇三・五〇七	七、七七七・一七五	一、三六九・七三九		四四一・六七八
作業需用費	〇	〇	〇	〇	〇		〇
中費	〇	〇	〇	〇	〇		〇
應費	〇	〇	〇	〇	〇		〇
十一年	四四一・六七八	八七一・六八六	五〇三・五〇七	七、七七七・一七五	一、三六九・七三九		四四一・六七八
合計	四四一・六七八	八七一・六八六	五〇三・五〇七	七、七七七・一七五	一、三六九・七三九		四四一・六七八

今般製粉器械場貸與スルニ付左ノ條ヲ堅ク遵守スベシ

明治十九年九月七日

北海道廳長官 岩 村 通 俊

五〇

第一條 製粉器械地所建物及附屬品共別紙(之ヲ略ス)明細書ノ通明治十九年九月十日ヨリ明治二十二年三月三十一日迄貸與ス但シ期限後尙貸下ヲ欲スルトキハ滿期百日前ニ出願スベシ詮議ノ上許可スル事アルベシ

第二條 貸下物件ニ對スル抵當トシテ該價格ノ年額金壹千貳拾圓ニ相當スル「公債證書地所建物」ヲ差出スベシ

第三條 一切ノ貸下物件ヲ場外ニ於テ使用シ又ハ之ヲ他人ニ轉貸スルヲ得ズ

第四條 天災ヲ除クノ外貸下物品ニ生ジタル損害ハ都テ之ヲ辨償スベシ

第五條 貸下物件ノ現形ヲ變更シ又ハ屋舎ノ増築ヲ要スルトキハ其都度出願許可ヲ受クベシ

第六條 貸下料トシテ其純益金百分ノ五ヅ、毎年四月ヨリ九月迄ノ分ヲ其年十月二十日迄翌年三月迄ノ分ヲ四月ニ

上納スベシ

第七條 臨時官吏ヲ派遣シ貸下物件及營業ニ係ル一切ノ帳簿ヲ検査スル事

第八條 前條ノ場合ニ於テ貸下物件ニ破損又ハ不足等アルトキハ臨檢官吏ノ指揮ニ應ジ速ニ之ヲ修理調製スベシ

第九條 該場ニ於テ製造スル物品ノ價格ハ其時々届出ベシ若シ其價格ヲ不當ト認ムルトキハ改正セシムル事アルベシ

シ

第十條 貸下期限内ニ於テ廢業スルヲ得ズ但シ不得止事故アルモノト認ムルトキハ之ヲ許ス事アルベシ

第十一條 營業ノ景況及貸下物件ノ調書ハ半季毎ニ其翌月十日限り必ズ之ヲ當廳勸業課ニ届出ベシ

第十二條 貸下中ニ要スル修理費及新調費ハ都テ自費タルベシ但シ滿期返納及廢業ノ場合ニ於テハ其營業中消費シ

タル修理費等ハ都テ還付セザルモノトス

第十三條 第四條第八條ノ場合ニ於テ修理調製ヲ命ジタルトキハ五日以内ニ必ズ處辨スベシ若シ正當ノ事故ナクシ

テ遷延二日以上ニ及ブトキハ當廳ニ於テ之ヲ處辨シ其費用ハ即時辨償セシムベシ

第十四條 前各條ニ違背シタルトキハ貸下ヲ停止シ又從ツテ損害ヲ生ジタルトキハ速ニ之ヲ辨償セシムベシ

以上が舊場に對する命令書で新場即ち宮原景雄、後藤半七、岡田佐助、谷吉三、野村忍助、小林十郎、木原慶輔等七名に拂下げた分に對しても同じく命令書があつた。即ち次の如きものである。

新製粉所拂下命令書

札幌區南二條西六丁目十一番地 士族

宮 原 景 雄

札幌區南二條西一丁目十一番地 平民

後 藤 半 七

札幌區南一條西三丁目三番地 平民

岡 田 佐 助

札幌區南三條西三丁目十三番地 平民

谷 吉 三

東京築地飯田町十二番地寄留
鹿兒島縣 土族

野 村 忍 助

新潟縣中頸城郡春日新田 平民

小 林 十 郎

札幌區南一條西二丁目十番地寄留

鹿兒島縣 土族

木 原 慶 輔

今般札幌製粉場地所建物其他ノ物件悉皆拂下候ニ付左ノ各條遵守スベシ

明治十九年十一月三十日

北海道廳長官 岩 村 通 俊

第一條 札幌製粉場地所代金九百五拾四圓、建物代金四千四百拾圓六拾四錢六厘、器械代金壹萬貳千八百六拾九圓

九拾貳錢九厘、器具代金四百壹圓六拾八錢六厘、備品代金百七拾貳圓五拾五錢七厘、通計金壹萬八千八百八圓八

拾壹錢八厘ハ本年十二月ヨリ明治二十二年十一月迄据置明治二十二年十二月ヨリ明治三十二年十一月迄向十ヶ年

賦ヲ以テ毎年十一月二十日限リ上納スベシ

第二條 第一條ノ金額完納ニ至ル迄ハ拂下建物器具器械備品共悉皆抵當トシテ當廳へ差出スベク地所ハ年賦金完納

ノ上地券ヲ交附スベシ

但シ地所ニ係ル一切ノ義務ハ工場受授ノ日ヨリ拂受人ニ於テ負擔スベシ

第三條 現在ノ製造品及原料品代價ハ追テ正算金額指示ノ日ヨリ三十日以内ニ完納スベシ

第四條 原料小麥買入直段ハ該年東京、大阪、宮城ノ三ヶ所平均相場ヲ低減スベカラズ

第五條 第一條ノ金額完納ニ至ル迄ハ臨時監査員ヲ派遣シ事業ノ實況及抵當現品等ヲ調査セシムル事アルベシ

但シ工場ノ會計ニ屬スル帳簿ハ別ニ設ケ置キ臨時監査ノ便ニ供スベシ

第六條 第一條ノ金額完納ニ至ル迄工場ノ模様替ハ其時ニ當廳ノ許可ヲ受クベシ

第七條 此命令ニ違背スルトキハ詮議ノ上拂下ヲ取消スベシ其節拂下品紛失若クハ毀損等ヲ生ゼルトキハ其代價又

ハ修繕費ヲ辨償セシムルハ勿論既ニ上納シタル年賦金ハ一切之ヲ拂戻サザルモノトス

拂下人七名ノ内後藤半七、岡田佐助、谷吉三の三名は當時の札幌に於ける屈指の豪商であつた。

次に製粉に關する古老深谷鐵三郎の言を掲げることとする

「札幌ノ小麥粉ハ仲々盛シナモノデ今日（明治卅一年頃）デハ本道ノ消費スル者モ多額ナル上内地へ輸出シ又遠ク露西亞マデモ輸出スル様ニナツテ居リマスガ其初メハ兼テオ話シタ第二ノ水車則チ工業ノ中ニ有ツタ水車ノ二階ヘ米國カラ石臼初メ諸機械ヲ取寄セテ据付ニナツタ其原料ノ小麥ハ矢張勸業局デ出來タノヲ使用シ又夫レガ爲メ其種ヲ態々獨逸等カラモ取寄セ大層好結果デ有ツタ其製造品ハ悉ク一番粉、二番粉、三番粉ト器械デ篩ヒ分ケラレルノデ別々ニシテ拂下ゲラレタ爲メニ市中人民ハ生活ノ力ヲ得タ者ハ實ニ澤山アツタ、即チ饅頭屋ヲ初メル者モアレバ饅頭素麵

屋ヲ初メル者モアルト云フ次第デアツタ然ルニ此機械ガ木工所ノ二階ナノデ下ヘハ粉ガ落ちル上ハ塵ガ這入ツテ相方迷惑ヲスルノデ南一條東二丁目ヘ佐藤勇次ノ請負デ立派ナ製造所ヲ建築セラレ運轉機械ハ米國カラ蒸氣機關ヲ取寄セテ盛ンニ製造スル事ニナツタ斯様ニ製粉ガ盛ンニナルト共ニ人民モ其麥粉ヲ使用スル途ヲ種々考ヘルノデ益々盛ンニナル遂濱方ニモ三十里、四十里ヲ掛ケテ拂下ゲニ來ル様ニナツタ斯様ニ盛ンニナルト同時ニ勸業ノ方デ出來ル麥ガ左様澤山ナイノデ此度ハ原料モ差支ヘヲ生ズル様ニナツタ。尤モ器械ノ方ハ蕎麥デモ唐黍デモ挽クカラ差支ヘハ無イノデアアルガ遠方カラ拂ヒ下ゲニ來ル者ナドハ折角遠路ノ處ヲ來ナガラ拂下ノ品物ガナクテ餘程困却スル者ガアル位デシタ

「第一ノ製粉所ノ製造ノミデハ市内ノ需要丈ニモ應ジラレナイ程盛ンニナツタノデ長谷部大書記官ガ工業局長ノ時ニ米國カラ器械ヲ取寄セテ初メタノデ是ハ第一ニ比スレバ餘程規模ノ大ナルモノデ今日（筆者註明治三十一年頃）後藤半七ト岡田佐助ガ引受ケテ遣ツテ居ルノデスガ、此製造場ノ出來タ時ニハ皆勸業ノ牛馬ヲ食物ニシタノヲ山下治兵衛ノ考案デ最初カラ生麩ヲ製造スル事ヲ發明シタノデ悉ク拂下ゲニナツタガ山下ハ其ノ後其麩カラ今一度麥粉ヲ取ツタ、即チ四番粉ヲ取ツタノヲ松尾某ガ知ツテ自分デ遣リタイト思ツテ其ノ事ヲ上申シテ拂下ゲヲ出願シタノデ官ノ知ル所トナリ何レヘモ拂下ゲナイ事ニシテ篩ヲ増加シテ四番粉、五番粉ヲ取ル事ニナツタノデ相方トモ何モナラヌ事ニナツタ」

十二、活版印刷所

札幌に於ける印刷業の創始は官民何れが先であつたか明かでないが、明治十年十月三日を以て開拓使本廳記録係に

於て活版印刷を開始してゐる。併し後に掲ぐる古老深谷鐵三郎の語る（明治三十三年述）如く間もなく火災の爲焼失したので、更に大通り西三丁目に活版印刷所を新築し事業を續けたが、明治十九年五月民業に移り、札幌活版印刷所と稱へた。

「活版所ノ初メテ設ケラレタノハ明治十二年ニ南一條東一丁目札幌御本陣ノ角ノ處ヘ平家西洋造白ペンキ塗デ立派ナ物ガ出來タ。官ノ仕事ハ勿論人民ノ注文ニモ應ズル事ニナツテ居マシタガ間モナク彼ノ三店（木村萬平、宮邊長七、伊坂市右衛門）ガ焼失致シタ時同時ニ焼ケマシタガ、是ハペンキ塗デ有タノデ火ヲ呼ブ事ガ早カツタ様デス。黒田長官ガペンキ塗ハ適當ノ塗料デナイト云フ主義ガ證明セラレタ一ツデス。直グ側ニ在ツタ改良掛ナドハ少シモ燒マセンノヲ見テモ明カデス。夫レカラ直ニ大通西三丁目ノ警察ノ裏ヘ建築ヲ致シテ是ヘ移轉ヲ致シマシテ前ノ通りニヤツテ居マシタガ今度ノ場所ハ開拓使ヘハ非常ニ便利デシタガ人民ノ爲ニハ少シ不便デシタ」

十三、馬具製造所

西洋形農具需要益々多きを加へて來たので明治八年八月農馬具製造所を上磯通（現在の南六條）に設け職工を東京より募つた。初めの中は費用嵩み創業より十一年迄三千四百三十七圓を費してをり收支相償はざる状態であつたが併し農事進歩には益する所大であつた。斯くして十一年二月職工黒柳喜三郎の乞を容れ機械屬具併せて價金千三百八圓九十八錢を四十ヶ月賦完納の約を以て賣下げた。

馬具製造に關する古老深谷鐵三郎（明治三十三年）の言を左に掲げ参考に供することとする。

「馬具職ノ黒柳喜三郎ハ最初勸業（開拓使勸業課ヲ指ス）ノ内デ新調製造共ニ遣ツテ居タガ後南一條通へ店ヲ出シタ。此ノ人ハ餘リ仕事ハ上手デナカッタガ交際上手デシタカラ官ノ仕事ハ勿論屯田ナドノ御用ヲモ聞イテ盛ナモノデシタ。後改良掛リデ雇ツタ金子兼吉ト云フ馬具職工ガ參ツテ専ラ改良掛リノ事ヲ勤メテ居リマシタガ此ノ人ハ黒柳ト違ツテ極ク職人肌ノ人デ遂ニ身ガ持テナイデ失敗シマシタ」

十四、酒造業

麥酒、葡萄酒、洋酒等の醸造が開拓使に依つて爲されたことは前に記した通りであるが、日本酒の醸造は初めから民間に於て營まれてゐた。

札幌で最初に酒造を初めたのは能登の人柴田與次右衛門で今の丸井今井商店の附近に小屋を建て、濁酒を造つて販賣してゐたと云ふことである。其の後佐野平三郎（後平十郎と呼ぶ）、多田市太郎、菅原儀左衛門、玉木伊八郎、朝山平助、藤井喜三郎、大湊市助、本郷八左衛門、本間長助等が來て酒造を初めた。明治五、六年迄は濁酒が主で清酒は造つてゐなかつたらしい。當時の醸造高は明でないが明治十七年以後三ヶ年間の札幌區に於ける狀況は次の通りである。

年	醸酒		造酒		高白酒		酒造人	出稼人
	清	濁	清	濁	清	濁		
十七年	一、五四石		四四石		六石		三	
十八年	三、六九七		一、四七七		一七		清酒のみを掲ぐ	
十九年	四、三八〇		二、六三六		二六			

第二 民業勃興時代の工業

一、製絲業

官營札幌紡織所々屬機械室及染室が十九年安田徳治に拂下げられたことは前編に掲げて置いたが、同紡織所製絲部も二十年九月十五日を以て、道内士族足立民治に次の條件を以て、三ヶ年間無料にて貸下げられ札幌紡織所は擧げて民業に移つた。

- 一、三ヶ年間賃貸料を徴收せざること。
- 一、左の通り補給金を交付すること。

二十一年	一、〇八六圓	二十二年	七六二圓
二十三年	三七四圓	計	二、二二二圓

- 一、北海道産繭の買入を拒むことを得ざること。
- 一、繭買入価格は毎年群馬、福島、山形三縣及横濱生絲相場を標準として定め、道廳の認可を得ること。
- 一、斯くして事業を續くること一ヶ年餘に及んだが養蠶の發達に伴ひ在來の器械二十四座にては消化し難き状態となつた爲、足立民治は今井藤七と謀り設備擴張の方途として金三万圓を以て設備一切の拂下げを受くること、補助を仰ぐ

ことの申請を道廳に提出、左の指令に基き拂下げられた。

指令

- 願之趣補助金ノ義ハ聞届ケ難ク拂下ハ特別ノ詮議ヲ以テ許可候條左ノ通心得ベシ
- 第一 土地ハ壹坪金八錢參厘ノ割合ヲ以テ拂下ゲ其地積ハ實測ノ上逐テ相達スベシ
 - 第二 建物拾參廉並ニ器械備品雜品ニ對シ金四千六百八拾圓八拾七錢參厘上納スベシ
 - 第三 製絲眞綿蠶繭ニ對シ金壹千八百拾壹圓參拾八錢上納スベシ
 - 第四 指令ノ日ヨリ九十日以内ニ代價完納セザルトキハ此指令ハ無効タルベシ

明治二十一年十月二十四日

北海道廳長官 永山武四郎

次に拂下後數年間の狀況を記すこととする。

一、原料 繭

二十三年	四一三、七六〇	二十四年	六一八、九三〇
二十五年	六六三、四四〇	二十六年	六六三、〇四四

二、生産 高

年	生 絲	屑 絲	眞 綿	年	生 糸	屑 糸	眞 綿
二十二年	三八四、四九 ^貫		一六、一〇〇 ^貫	二十四年	四九五、〇〇〇 ^貫	一五〇、〇〇〇 ^貫	三三、〇〇〇 ^貫
二十三年	三二、七三三 ^貫	一三、七三〇 ^貫		二十五年	五三、四九〇 ^貫	一五〇、〇〇〇 ^貫	三二、二五〇 ^貫

三、收支狀況

年	收 入	支 出	損 益	年	收 入	支 出	損 益
二十一年	七、三三〇・三三 ^円	一三、七七八・五 ^円	△ 五、五四八・一四 ^円	二十四年	一九、五〇〇・〇〇 ^円	一八、三三三・二九 ^円	一、一六六・七一 ^円
二十二年	一三、三六七・七 ^円	一五、六二七・〇〇 ^円	△ 二、二五九・〇三 ^円	二十五年	二六、三二一・八八 ^円	二二、六四五・一九 ^円	四、六六六・六九 ^円
二十三年	一四、三六〇・六 ^円	一三、二八一・三 ^円	一、〇九九・二八 ^円				

四、資本金

二十二年に於ける資本金は一万三千圓であり、二十三年に二万圓に増したが二十四年一万八千六百圓に減じ二十六年更に一万八千圓に減資してゐる。

五、職工數

年 次	職 工 數	年 次	職 工 數
明治二十年	五三	明治二十二年	四五
明治二十一年	五〇	明治二十三年	四九
明治二十二年		明治二十四年	四七
明治二十三年		明治二十五年	六三
明治二十四年		明治二十六年	六五

二、製 麻 業

北海道の地味風土は亞麻の栽培に適し、明治七年早くも時の長官黒田清隆に依つて耕作が試みられてゐるが、亞麻工業を起すことに就ては明治十年勸業寮出仕吉田健作に依つて唱道せられたのが初めである。而して吉田健作は三年間佛白兩國に於ける亞麻工業を視察し、且つ實地につき體驗し歸朝の翌明治十五年北海道を視察した際、室蘭屯田兵舎に於て亞麻莖を發見し亞麻作に適するを知り、亞麻工業設立に付資本家有志を説いたが、其の努力酬いられて明治二十年札幌に北海道製麻會社の創立を見るに至り、吉田健作は北海道廳技師に任ぜられ、創立委員長として事業計畫に當り創立と共に社長に任ぜられた。吉田健作は獨り北海道の製麻事業に貢獻したばかりでなく其前十七年既に近江製麻會社を設立せしめてをり、我國製麻事業の大先覺である。

以下北海道製麻會社設立の經過並に事業の概要を掲ぐることにする。

明治十九年北海道廳理事官堀基は北海道に製麻事業を企劃し、設備に關し吉田健作の意見を求め、事業計畫を樹て岩村長官、堀理事官等吉田、横田兩技師と謀り京都、滋賀、東京及北海道の有力者に説いた結果議熟し二十年四月九日付を以て永山盛繁外七名（滋賀三名、京都三名、東京二名）に依り次の如き計畫の下に創立願が北海道廳長官に提出せられた。

一、資 本

資本金を八拾萬圓と定め一株百圓、八千株を募ること。

株金募集時より滿七年間六朱の利益保證を仰ぐこと。

二、營 業 年 限

營業年限を二十ヶ年として更に永續せんとするときは官の允許を請ふこと。

三、事 業

麻苧亞麻を以て麻布を紡織し之を販賣すること、隨つて工業に必要な麻苧亞麻を買入れ麻糸麻布等を賣却する外他の賣買事務に干與せざること。

四、役 員

左の役員を置くこと。

委員長	一	委員副長	一
委員	三以上	支配人	一
技術長	一	技術副長	一
屬 員	若干		

但し委員は五拾株以上所有者より總會に於て選舉すること。

五、純 益 配 當

純益配當は左の通りとすること。

準備金 純益の百分の十五より三十迄
 役員賞與金 純益の百分の十迄

斯くて道廳に於て審査の結果明治二十年五月二十三日付を以て設立認可となり、同年六月二十九日左の命令書を會社に交付した。

命 令 書 北海道製麻會社

第一條 其會社ノ株金募集ノ翌月ヨリ營業開始ノ日マデ其拂込金額ニ對シ一ケ年五銖ニ相當スル利子ヲ下付シ營業開始ノ後純益ノ配當五銖ニ上ラザルトキハ總銖金額ニ對シ年五銖迄ノ不足額ヲ補給スベシ

但本文純益配當トハ會社總收入ヨリ營業費及起業費償還ノ爲メ起業資金額ノ二十分ノ一ヲ引去リタル自餘ノ金額ヲ云フ

第二條 第一條利子下付及利益保證年限ハ通シテ滿六ケ年間トス

第三條 利益保證年限中其會社ニ於テ北海道人民ヨリ購入スル麻苧亞麻ノ價格ハ毎年北海道廳長官ノ許可ヲ經テ之ヲ定ム可シ

第四條 利益保證年限中ハ相當ノ事故ナクシテ北海道人民ニ對シ麻苧亞麻ノ購入ヲ拒ムヲ得ズ

第五條 利益保證年限中左ノ各項ハ株主總會ニ於テ議決ノ上北海道廳長官ノ認可ヲ經テ執行スベシ

一 會社ノ定款ヲ更正スルコト

二 會社ノ資本金ヲ増減スルコト

三 會社ノ負債ヲ起ス事

第六條 其會社收支計算並ニ營業上諸般ノ景況ハ毎年六月十二月ノ二季、正副委員長及委員ノ當選解任ハ其都度北海道廳長官ニ申告スベシ

第七條 利益保證年限中北海道廳長官ハ臨時官吏ヲ派シ其會社ノ諸帳簿及財産物件ヲ検査セシムル事アル可シ

第八條 其會社ニ於テ此命令書ノ明條ニ違背スルトキハ北海道廳長官ハ之ヲ制止シ又ハ營業ヲ停止スル事アル可シ

第九條 北海道廳長官ニ於テ必要ト認ムルトキハ第一條第二條ヲ除クノ外此命令書ヲ更正スル事アルベシ

但シ此場合ニ在リテハ豫メ其事由ヲ明示スベシ

〔備考〕二十三年十一月四日付を以て第五條及第八條を左の通り更正せられた。

第五條 利益保證年限内ニ於テ會社ノ定款ヲ更正セントスルトキハ北海道廳長官ノ認可ヲ受クベシ

第八條 此命令書第四條第五條第七條ニ違背シ又ハ正當ノ理由ナクシテ休業スルトキハ利益ノ保證ヲ止ムル事アルベシ

此命令に基き創立規約を定め設立經費、製造高、收支計算等の概算書を作成、十一月東京濱町蜂須賀邸に於て第一回株主總會を開く運びとなつた。今北海道及東西兩京滋賀等の株主總代に於て決議決定した條件其の他事業計畫の重なるものを擧ぐれば左の如くである。

一、當社を北海道製麻會社と稱し資本總額を八十萬圓とすること。

二、資本金の各地分擔割合は北海道十萬圓、東京三十萬圓、京都及滋賀四十萬圓とすること。
三、資本金拂込期限及一株に對する拂込金額は左の如くすること。

第一回	三圓	二〇年六月	第四回	三〇圓	二二年八月
第二回	一二圓	一〇月	第五回	二五圓	二二年一月
第三回	二〇圓	二二年四月	第六回	一〇圓	四月

四、創立委員は京都、滋賀地方より二名、東京より一名、北海道より一名を選び開業迄の事務を委託すること。
五、資本金中六十二萬七千三百十五圓を起業費に充て残餘を運轉資本とすること。

六、一ヶ年の麻製造高三十八萬九千二百八十圓、此の原料代十四萬四千圓と見積り差引二十四萬五千二百八十圓の收入を得ること、尙織物に於て外に三万四千二百五十圓の收入を得ること、し結局總額二十七萬九千五百三十圓の收入を擧ぐることを。

七、七万六千八百圓を營業費とし三万三千三百六十五圓を起業費二十ヶ年賦拂戻金に充て、四万圓(資本金に對する年五分)を積立て差引十三万七千九百九十七圓の純益を得ること

以上の如き計畫が樹てられ近江麻絲紡織株式會社員宮村朔三を臨時に雇入れ工場建設に着手する一方吉田健作は二十年十一月工藝視察を兼ね機械購入並に外人雇入の用務を帯びて横田技師と共に佛、獨、白三國に出張、一年餘を経て歸朝、購入機械を小樽港に陸揚し雇入たる歐人四名に蒸氣機械、紡績機械、晒白機械、製織機械を分擔据付に着手せしめた。又一方亞麻の栽培に對しても二十年會社設立と共に札幌附近二十町歩の地に亞麻を耕作せしめ二十二年白

耳義より老農コンスタン・オイブレヒトを聘し指導に當らしめ増産を計つた。

斯くして原料方面も略整ひ職工を札幌、東京、京都、大津、鹿兒島、福岡等より募集し紡織設備亦着々進捗し二十三年七月全く竣成を告げ全作業を開始するに至つた。

一方北海道廳に於ては製線事業を計畫したが半途にして挫折した爲め同社に於て之を經營することとなり、二十二年六月札幌郡雁來村に工事を起し同年竣成、白耳義人前記コンスタン専ら技術の指導に當つた。又二十三年琴似村に製線所を設立する事となり七月工を起し十一月を以て完成した。

爾來多少の曲折はあつたが先づ順調に事業が進められた
以下少しく事業開始前後より二十六年に至る期間に於ける狀況を摘記することとする。

一、補給金

北海道廳の命令に基き補給を受けた金額は次の通りである。

明治二十一年	一八、四九一・九〇〇 ^円	明治二十四年	四〇、〇〇〇・〇〇〇 ^円
〃 二十二年	二八、六三一・八三三	〃 二十五年	四〇、〇〇〇・〇〇〇
〃 二十三年	一七、六一八・九一七	〃 二十六年	—

二、原料需給狀況

紡績原料として使用したものは専ら大麻及亞麻の二種であり北海道の大麻は初め紡績用に適しなかつたが後歐洲の製法を採用し紡績に適する大麻纖維を製出する様になつた。そこで會社は大麻耕作に力を盡し當別村の如き最優秀

原料を産出するに至つた。

其の後亞麻耕作の發達するに従つて大麻は漸次需要を減じ後には亞麻纖維の補充として使用するに過ぎない様になつたのであるがその詳細は後編に於て述べる。

本期間會社に於て買収した大麻及亞麻の數量並に作付反別は次表の通りである。

大麻

年次	作付反別	生産額	年次	作付反別	生産額
明治二二年	一八九・〇〇町	一、五二、九六斤	明治二五年	二六・四八町	九四八、〇五九斤
〃二三年	七七・四三	七六八、〇〇三	〃二六年	五〇・二六	二、〇三九、九三八
〃二四年	五四・八四	四三六、六三四			

亞麻

年次	作付反別	生産額	年次	作付反別	生産額
明治二二年	町 (豐作)	一、五、二五七斤	明治二五年	町 (蟲害)	九四四、〇九五
〃二三年	町 (早魃)	一、四六、八七三	〃二六年	町 (普通作)	—
〃二四年	町 (蟲害)	四九三、八二二			

北海道に於ける原料は前表の如くで會社の事業進捗に伴ひ原料の不足を來したと、他に作業技術の方面に於て

優秀原料を必要とする關係から内地或は外國より原料を購入してゐた。外國物としては印度麻纖維、歐洲亞麻纖維等である。購入量は年々異なつてゐるが、二十五年に於ける北海道及外國原料購入數量を示せば左の如くとなつてゐる。

種別	北海道		種別	府縣	
	購入量	金額		購入量	金額
亞麻莖	九五九、三七斤	一、〇九、五六円	大麻纖維	七、二五四斤	一三、二四九、〇〇
大麻莖	九六九、五六	七、七六、七〇	亞麻纖維	二六、七三三	六、〇九七、六三
亞麻纖維	三、一五	四八、二、三六	大麻纖維	六八、三三七	四、八四六、四七
大麻纖維	六、三七九	八三、八〇	合計	二、一〇、七九〇	四三、三四、三二

三、生産狀況

二十三、四年頃迄は原料豫期の如く整はなかつた爲め紡織機械の如きは全運轉を爲し得ない狀況に在つたが需要は相當に活況を呈してゐた。二十四年頃北海道に於て賣行の盛んであつたものは靴糸、粗製ズック、日覆地等で内地方面では江州蚊帳最も需要多く桐生、足利地方へ絹交織用として細糸、海軍用帆布製品が主で精製品の需要は微々たるものであつたが漸次需要を増した爲め二十五年には糸類三十八万四千五百餘斤、織物類十一万七千三百三十一碼二十六年には糸類五十二万七千六百六十餘斤、織物類二十一万六千二百九十碼を生産したが尙原料不足の爲め需要を満たし得ない状態であつた。

尙二十四年一月より九月迄の期間に於ける生産内譯は次表の通りである。

品目	製造高	販賣代價		品目	製造高	販賣代價	
		數量	代價			數量	代價
生麻糸	四八七、二九・〇 <small>英斤</small>	一〇八、五八・〇 <small>英斤</small>	三三、三九・五三 <small>円</small>	織物	(磅) 六四、六四六	(磅) 一七、五四・五	三、八四九・九六 <small>円</small>
晒麻糸	三、二八・五	一〇、六六・四五	五、三九五・八二七	總計			四三、八七五・六七六
雜麻糸	八、六〇三・七五	七〇七・二五	三三〇・七五				

四、收支狀況

明治二十四年一月より九月迄の期間に於ける收支狀況は次表の通りである。

收	入	支		出
		本社	工場營業費	
織物賣上代及貯藏	七、二〇・六一 <small>円</small>	本場營業費	一五、五六三・三五三	
製糸賣上代及貯藏	四八、三六・八四三	分社及出張所費	七四、〇七・八五四	
煎糸貯藏	四、〇四・五三五	製線所費	五、九八・七七四	
雜收	八四三・〇三五	別途積立金	六、八三九・七八三	
在庫品	四五、七九・三九九	損益勘定金	八三八・一六三	
補給(二十三年度ニ屬スル)	一〇、〇〇〇・〇〇〇	配當金	三九一・九九五	
總計	二六〇、二九七・三	總計	二六、〇一三・九七三	

尙二十五年度は總收入十九万四千八十五圓二十一錢三厘、總支出十八万九千五百九十四圓五十八錢七厘、利益四千

四百九十圓六十二錢六厘であつた。又二十六年六月十五日の臨時總會に於て一株の配當を二圓五十錢と決し社債十萬圓募集を決議したと云ふ記録があるが當時の收支狀況、社債の使途等は明かでない。

三、織物業

札幌紡織所機織部は十九年安田徳治に於て貸下げを受け安田機織所と稱へ、經營を持續すること二年に及び二十一年十月に至り漸く事業繼續の目算が立つたので、拂下げ願を道廳に提出し、土地一坪八錢三厘此金額百三圓五十一錢建物十廉に對し四十九圓四十五錢三厘、器具類に對し八十八圓九十三錢三厘即納の約を以て拂下げられた。尙當時の事情を知悉するに便する爲、拂下願書の大要を掲げることとする。

機織場御拂下願

私儀

一昨十九年十月ヨリ向フ五ケ年間機織場御貸下事業繼續ノ恩命ヲ蒙リ爾來專ラ該業ニ從事罷在候處本年九月ヲ以テ滿二ケ年經過仕候ニ付事業ノ順序稍緒ニ就キ將來維持ノ目途略相立申候然ルニ當初本場拜借ノ目的ハ舊開拓使御廳ニ於テ各郡村ヨリ産出生繭買上ノ内屑繭消流ノ爲メ御設置相成候儀ニ御座候得ハ右御主意ハ充分奉體シ殊ニ養蠶御獎勵特別御保護相成候事情モ御座候ニ付期シテ將來蠶業者増殖産繭加倍隨テ屑繭産出モ亦増額仕候ハ必然ノ儀ニ付愈此繭消流ノ途ニ於テ機業ノ儀モ蠶業ト隨伴擴張ノ計畫十分可相立加之養蠶御保護ノ道ニモ相適ヒ候事業ト思考仕殊ニ本場御貸下ノ際製絲所ノ儀ハ尙依然官廳ノ御事業ニモ有之機織材料絲ハ御製造ノ糸時々御拂下仰願仕加フルニ

各郡村ヨリ産出ノ製絲ヲ買入候見込モ有之候得共未ダ製絲ノ供給者無之事故村民稀ニ製出候モ僅々ニシテ迎モ私事業一ケ年間材料到底依頼スヘキ見込無之然ルニ昨二十年九月中製絲所ノ儀ハ足立民治へ御貸下相成事業上ノ關係隔絶候ニ付織物用材糸ノ目的頓ニ斷切不得止更ニ製絲所ニ於テ用不用ノ下等繭及屑繭昨二十年春繭十五石一斗七升六合五勺夏繭三十三石二斗三升五合一勺本年又二月中舊繭十一石三斗二升四合七テ五十九石七斗三升六合此代金八百五拾壹圓參拾錢四厘、買入ノ外製絲ニテ三貫四百八匁五分ヲ買入其際更ニ出願御許可ヲ得本場敷地内へ坐繰製絲室新設織物用料糸製造相始メ又本年ハ特別ニ製絲所ハ談示ヲ遂ゲ該所生繭買入ノ節其場ニ於テ屑繭ノ分ハ該所買入値段ヲ以テ悉皆買受此繭三十三石二斗三升六合他所ヨリ六十九石八斗八升五合一勺夏繭十三石六斗六升九合二勺合セテ九十三石七斗七升一合此代價千五拾圓貳拾四錢九厘ノ外製絲ニテ買入ノ分三貫七百八匁三分此代價金七拾圓四拾壹錢貳厘買入ノ故内地各處機織者ノ如キ材料糸ヲ漸々ニ買入ノ便利無之一ケ年一期ニ資材ヲ投ジ材料繭買入ノ儀ニ付事業上聊カ困難ヲ覺ヘ候得共幸ニ製造品販路モ一昨十九年十月ヨリ二十年九月迄滿一ケ年間ニ在テハ製造額ノ内漸クニシテ三分ノ二ヲ賣却シ三分ノ一ハ相殘且收支上ニ於テモ五拾圓ノ不足ヲ生ジ候モ昨二十年十月ヨリ本年九月迄一ケ年間ニ在ツテハ前年度ノ餘剩ヲモ略賣却シ加之製造品ハ四分ノ三ヲ既賣シ僅ニ未賣品ハ四分ノ一ヲ殘スノミ而シテ收支上ニ在テハ百餘圓ノ潤益ヲ見ルニ至リ最早營業維持ノ方法ニ於テ將來敢テ差支も有之間敷ト確信仕候依テ今後ニ至ツテモ尙蠶業御獎勵ノ御主意ニ基キ又蠶業者ノ失望無之様屑繭買入方ニ於テ充分勉勵仕候ハ、繭價モ本位ヲ生ジ隨テ營業モ自然處ヲ得可申就テハ漸々各場ノ儀モ夫々御處分相成候折柄私儀モ微力ナガラ本場御拂下請願仕度未ダ拜借年限中恐多ク候得共各場御處分ノ振合ヲ以テ是迄御貸下ノ地所建物及機織具並ニ拜借官舎及敷

地共相當價格ヲ以テ代價即納御拂下被成下候様奉願度別紙豫算書相添此段奉願候也

斯くて資本金を五千圓と定め個人經營にて引續き事業を營んでゐた。次に機紡に對する若干の資料を掲げる。

一、原料

原料方面に就ては拂下願書に其の梗概が示されてあるから茲に記することを省くこととする。因に明治二十三年には原料として生絲八十一貫餘を購入してゐる。

二、製造品目

製造品目は官業時代と殆んど相違なく絹織、絹綿交織物、帶地、鼻拭布等が主であつて、織物は専ら縞物上等品を製してゐたが孰れも需要多く殊に鼻拭布の如きは顧客の要求に應じ得ない程であつた。併し縞物は世人の嗜好區々で多額の費用を要する爲、二十三年頃から白斜子に主力を注ぎ、猶將來は製糸に重きを置き傍ら機織をなす計畫を樹てた。

三、收支狀況

年次	收入	支出	損益	年次	收入	支出	損益
明治二十年	二、六六三	二、七三九	△ 六	明治二十三年	三、四三六	三、四三三	四
〃二十一年	二、九〇二	二、七六八	一三三	〃二十四年	六、八九一	六、七五〇	一四一
〃二十二年							

四、職工數

年次	明治二十年	明治二十一年	明治二十二年	明治二十三年	明治二十四年	明治二十五年	明治二十六年
職工數	二六	三	二五	三〇	三一	四三	四七

四、製網業

官營札幌製網場は明治二十年十月二十八日鹿兒島縣士族永山盛繁に拂下げ業を繼續せしめた。當時の命令書は次の通りである。

命令書

- 第一項 札幌製網場地所三千四百七十七坪ハ一坪金貳拾五錢ノ割即チ金八百六拾九圓貳拾五錢、建物ハ金六百五拾五圓八拾九錢ヲ以テ本年ヨリ明治二十六年迄七ヶ年賦ヲ以テ拂下候條毎年十二月廿日限り年賦金上納スベシ
- 但シ土地建物ニ係ル義務ハ工場授受ノ日ヨリ拂受人ニ於テ負擔スベシ
- 第二項 器具備品ハ代價即納ヲ以テ拂下グベシ
- 第三項 年賦金完納ニ至ル迄ハ土地建物ハ抵當トシテ官廳ヘ差出スベシ
- 第四項 事故アリテ事業ノ目的ヲ變更セントスルトキハ當廳ノ許可ヲ受クベシ
- 第五項 年賦金完納ニ至ル迄ハ當廳ノ許可ナクシテ土地建物ノ現形ヲ變換スルヲ得ズ

第六項 此命令ニ違背シ又ハ事業ヲ怠リタルトキハ拂下ヲ取消シ從テ生ズル損害ハ之ヲ辨償セシメ既ニ上納シタル年賦金ハ下戻サザルベシ

明治二十年十月二十八日

北海道廳長官 岩村 通 俊

尙札幌製網場の職工數は次の通りである。

年次	明治二十一年	明治二十二年	明治二十三年	明治二十四年	明治二十五年	明治二十六年
職工數	一九〇	三四〇	二五〇	二五〇	三五〇	二五〇

同製網所は二十二年資本金五千圓の會社組織に改められたが、二十四年に五百圓、二十五年に千圓の減資を爲し三千五百圓となつた。二十一年に於ける收支狀況は收入壹千三百五十圓に對し支出一千四百圓であり、又二十四年は原料麻二千六貫目を一千五百五十七圓にて購入、練網八十八反、刺網二百三十六枚、鮭網三百十三反、網孳百二十七貫目を造り、三千八百八十四圓の收入を得、概算五百八十圓の残品を残したが、四千九百二十九圓を支出した爲、残品を加へても猶四百六十餘圓の缺損を出してゐる。

尙外に南二條西二丁目に製網場があつた。資本金三千圓、職工數は二十二年四三八名、二十三年二五〇名であつた所を見れば相當大規模のものであつたらしいが詳細の記録を缺いてゐる。

五、染色業

明治十八年五月南一條西一丁目に市村染工場が設けられ染色の業を營んでゐたが詳しいことは判らない。

六、鐵工業

開拓使七製造所中鐵工關係工場が合して札幌鐵工場となつたことは前編に記した如くであるが、其の後同場も亦民業に移つてゐる。即ち明治二十年五月深野正之助に貸與し、翌年九月同人に拂下げられた。札幌鐵工場後に札幌農具製作場と稱せられてゐたものが其の後身である。
 今二十年以降に於ける状況をせば次表の通りである。

年次	資本金	職工數	雇人	収入	支出	年次	資本金	職工數	雇人	収入	支出
明治二十年	五、〇〇〇	三	五	三、八五九	六、九〇八	明治二十三年	〃	〃	〃	〃	〃
〃二十一年	五、〇〇〇	二四	一	八、七九七	七、五三〇	〃二十四年	九、七二	三	〃	〃	〃
〃二十二年	一〇、〇〇〇	三	〃	〃	〃	〃二十五年	一〇、〇〇〇	三	〃	〃	〃

七、鑄物業

開拓使の鑄物場が十七年鐵工場に合併せられたことは、記録の示す所であるが、同一場所大通東四丁目に鑄物場が残つてゐた。同場の創立が明治二十年七月となつてゐる所を見れば、一旦鐵工場に合併せられ、後更に分離して獨立經營に移つたものゝ如くである。
 鑄物場の二十五年迄の状況は次の如くである。

年次	資本金	職工數	収入	支出	年次	資本金	職工數	収入	支出
明治二十年	〃	八	八、五五	七、〇六	明治二十三年	〃	〃	〃	〃
〃二十一年	二、〇〇〇	四	一、九一八	一、六六三	〃二十四年	一〇、九七六	一四	〃	〃
〃二十二年	一、五〇〇	五	〃	〃	〃二十五年	一〇、〇〇〇	六	〃	〃

八、木工業

開拓使七製造所の内木工關係を合し、明治十七年から札幌木挽所と稱へ事業を續けて行つたことは前編に記した通りであるが、其の後民間に拂下げられたものゝ如く、二十六年の記録に依ると森源三の所有となつてゐる。
 本場の二十六年迄の状況中判明せる所を記せば次の如くである。

年次	資本金	株主又ハ持主	職工數	雇人	収入	支出	年次	資本金	株主又ハ持主	職工數	雇人	収入	支出
明治二十年	四、一〇〇	二	一六	三	一、七〇	一、五〇〇	明治二十四年	一九、三九	二	三	〃	〃	〃
〃二十一年	一五、〇〇〇	二	一〇	七	三、〇〇〇	九、五〇〇	〃二十五年	二〇、〇〇〇	二	二	〃	〃	〃
〃二十二年	二二、〇〇〇	〃	一四	〃	〃	〃	〃二十六年	二〇、〇〇〇	二	二	〃	〃	〃
〃二十三年	〃	〃	一三	〃	〃	〃							

尙ほ二十六年中の仕入用材は角材二万八千六百四十石餘一萬六千二百六十五圓であつて、内建築材柱板類に製造し

たものは、一万八千四百九十一石餘一萬三千二百九十圓であり、此内賣捌いたものは建築用柱其他四万本、板類三万五千坪であつて、賣上金高一萬一千四百十七圓に上つてゐる、尙ほ此の外木工關係の事業として次の如きものがあつた。

一、木 具

北一條東三丁目、木具製作場があつた、十九年六月の設立に係り十三名の職工を使用してゐた。

二、軸 木

南五條西五丁目、軸木工場があつたが、二十一年十二月に設立したもので、職工數は明治二十二年三十名、二十三年十四名であつた。

三、洋 樽

南七條西二丁目、洋樽製作所があつた、其の設立は明治二十二年九月で、資本金一千圓(後に三千圓に増資)、職工六名を使用してゐた。

九、硝子業

石田硝子工場と稱せるものが北七條西四丁目にあつて、硝子を製造してゐた、創立は明治二十三年八月で資本金五千圓(後三千圓となる)、職工十一名乃至十四名を使用してゐた。

十、硝石業

東京白焰社の札幌分社が明治二十年八月南三條西二丁目設立せられ、二十二年北海道白焰社と改稱山鼻に工場を有し、經營を續けてゐたらしいが、二十三年以降記録もなく其の後の狀況を知ることが出来ない。同社の二十年及二十二年の狀況は次の如くである。

年次	資本金	株主	職工	雇人
明治二十年	二、九五〇 <small>円</small>	五七	一	六〇〇 (延人數の如し)
二十二年	五、〇〇〇	一八	三	一

十一、骸炭業

北七條西三丁目骸炭組合と稱するものがあつて、骸炭を製造してゐた。其の創立は明治二十四年十一月で資本金五千圓、職工二十名を使用してゐたが、幾ばくもなく業を廢したものと、如くである。

十二、製藍業

製藍は開拓使の置かれた時から製煉課に於て試みられてをり、又篠路村に於ても明治十五年五月徳島縣人瀧本五郎等の創設に係る資本金二万圓の興産社に於て製藍事業が營まれてゐたが、同社の事業擴張計畫に依り明治二十一年本

社を札幌に移すこととなり、二十二年九月を以て北四條西十四丁目に工場の竣成を見、爾來札幌に於ても、篠路と並び製藍事業が行はれるに至つたのである。同社は前記擴張計畫に伴ひ、資本を五万圓に増資し二十一年七月九日道廳に對し資本金に對する利子の補給願を提出したが、其の結果同年九月十七日附を以て道廳より會社に對し左記の命令書が交付せられた。

命令書

石狩國札幌郡篠路村
興産社

第一條 其社純益ノ配當一ケ年五朱ニ上ラザルトキハ本年八月ヨリ明治廿六年七月マデ滿五ケ年間現株金額ニ對シ年五朱迄ノ不足額ヲ補給スベシ

但本文純益配當トハ其社總收入金ヨリ營業費及起業費償還ノ爲メ收入金高ノ二十分ノ一ヲ引去リタル自餘ノ金額ヲ云フ

第二條 利益保證年限中其社ニ於テ北海道人民ヨリ購入スル葉藍ノ價格ハ毎年北海道廳長官ノ認可ヲ經テ之ヲ定ムベシ

第三條 利益保證年限中左ノ各項ハ株主總會ニ於テ議決ノ上北海道廳長官ノ認可ヲ經テ執行スベシ

一、定款ヲ更正スル事

二、資本金ヲ増減スル事

三、負債ヲ起ス事

第四條 利益保證年限中其社收支計算並ニ營業上諸般ノ景況ハ毎年十二月北海道廳長官ニ届出ヅベシ

第五條 利益保證年限中北海道廳長官ハ臨時官吏ヲ派シ其社ノ諸帳簿及財産物件ヲ檢査セシムル事アルベシ

第六條 其社ニ於テ此命令書ノ條項ニ違背シ又ハ事業ヲ怠リタルトキハ北海道廳長官ハ此命令書ヲ取消ス事アルベシ

第七條 北海道廳長官ニ於テ必要ト認ムルトキハ第一條ヲ除クノ外此命令書ヲ更正スル事アルベシ

但此場合ニ在テハ豫メ其理由ヲ明示スベシ

右命令ス

因に右命令書中第三條及第六條は二十三年十一月四日次の如く更正を見た。

第三條 利益保證年限内ニ於テ會社ノ定款ヲ更正セントスルトキハ北海道廳長官ノ認可ヲ受クベシ

第六條 此命令書ノ第三條第五條ニ違背シ又ハ正當ノ理由ナクシテ休業スルトキハ利益ノ保證ヲ止ムルコトアルベシ

以下同社の事業の概要を掲げることとする。

一、原料

原料は大部分篠路、丘珠、苗穂、札幌、豊平、白石、月寒、山鼻、琴似の九ヶ村より求めてゐたが外に、石狩郡

高岡、余市郡仁木ニケ村よりも若干購入してゐた。同社に於て耕作し或は購入した原料の數量を示せば次の如くである。

年次	葉 購		入		本社耕作	備 考
	藍	藍	藍	葉		
明治二十二年	三〇、〇八三・四三	〃	〃	〃	〃	氣候不順の爲收穫減少す。
二十三年	一六、七五四・五六	〃	四五、三九六・六三	〃	〃	
二十四年	八、三七九・五六	〃	一五、三三二・五〇	〃	二、一五六・〇〇	
二十五年	一五、四八〇・二八	〃	一七、七四一・八〇	〃	四〇、〇〇〇・〇〇	
二十六年	〃	〃	〃	〃	〃	

二、生産

生産の主なるものは染藍、藍玉の二種であるが、二十二年から二十三年に亘り藍靛を試製し好成績を納め爾來製造を繼續するに至つた。又葉藍を以て泥狀インデゴを造り之を分析した所一貫目に純藍六十三匁八分を含み之亦中等以上の品位であつた。生産高は概して原料の支配を受けてをり、二十四年の如きは凶作の爲め原料不足且つ粗悪の爲良品を得ることが出来なかつたのみならず、特約以外の需要を満し得なかつた。同社の特約販賣所は東京、新潟、愛知、山梨、埼玉、静岡等の各地に設けてあり、猶他の地方にも需要があつたが、原料の關係で販路を擴張し得ない状態にあつた。

明治二十年以降に於ける生産高は次の通りである。

年次	染藍及藍玉		藍 靛		泥 狀 インデゴ
	數量	價格	數量	價格	
明治二十年	六、六五〇	〃	〃	〃	〃
二十一年	三、七〇〇	〃	〃	〃	〃
二十二年	二四、三六三	〃	〃	〃	六〇〇
二十三年	一三、二九八	〃	一、九五六	〃	〃
明治二十四年	一一、二七五	〃	〃	〃	〃
二十五年	一三、二八九	〃	〃	〃	〃
二十六年	八、九九四	〃	〃	〃	〃
二十七年	〃	〃	四八	〃	〃
二十八年	〃	〃	三三	〃	〃
二十九年	〃	〃	三三	〃	〃

三、收支状況

收支状況並に道廳より補給を受けた金額は次の通りである。

年次	補給利子		年次		補給利子	
	收 入	支 出	年次	收 入	支 出	
明治二十二年	一八、五四七・七	〃	明治二十四年	九、九九六・九四	二、九八五・九七	
二十三年	一八、五四七・七	〃	二十五年	一一、五〇三・三〇	一一、〇九八・一一	
二十五年	〃	〃	二十六年	〃	〃	
二十六年	〃	〃	二十七年	〃	〃	
二十七年	〃	〃	二十八年	〃	〃	
二十八年	〃	〃	二十九年	〃	〃	
二十九年	〃	〃	三十年	〃	〃	

備考 二十四年は原料不足の爲缺損を出したが、二十五年に至り原料、生産共に順調に復し、而も徳島其の他の藍産地干害の影響を受けて、商況好轉し利益を収めることが出来た。因に二十六年に於ける札幌工場の職工數は二十二名であつた。

十三、麥酒醸造業

官營札幌麥酒醸造場は大倉組商會頭取大倉喜八郎に拂下後、道廳は命令條項に基き二十年九月醸造師マックスボルマンを雇入れ之を醸造場に派し指導に當らしめた。同年十二月大倉喜八郎より年賦上納及補給年限改訂の出願があ

り、左の通り命令が下つた。

- 一、年賦上納金ハ當初命令ノ年ヨリ滿五ケ年間据置ノ義聞届ク
 - 一、醸造師ポールマンニ關スル旅費給料ハ同上命令ノ年ヨリ滿三ケ年間特別ヲ以テ當廳ヨリ補給スベシ
- 斯くて本場を會社組織に改むることとなり、大倉喜八郎は東京府平民澁澤榮一外三名と共に出願したのに對し認可せられ、明治二十一年三月十六日北海道廳長官岩村通俊より左記の如き命令書の下附があり、資本金七万円を以て札幌麥酒會社の設立を見るに至つた。

命 令 書

札幌麥酒會社創立發起人總代

- 東京府下深川區福住町四番地 澁澤榮一
- 東京府下深川區清住町一番地 淺野總一郎
- 東京府下麹町區五番町十四番地 西川虎之助
- 北海道廳下札幌區南三條西三丁目十三番地 土田政次郎
- 東京府下京橋區銀座三丁目三番地 大倉喜八郎

明治二十年十二月二十八日付ヲ以テ曩ニ東京府下京橋區銀座三丁目三番地大倉喜八郎へ拂下タル札幌麥酒醸造場ノ地所建物器械其ノ他一切ノ物件讓受ヲ許可シタルニ付右拂下代年賦金完納ニ至ル迄ハ此命令ヲ遵守スヘシ

第一條 札幌麥酒醸造場地所代金參百九拾八圓參拾錢五厘、建物代金壹萬七千五百七拾貳圓九拾五錢二厘、器具代金八千〇五拾三圓六拾壹錢六厘、備品代金六百四拾七圓參拾六錢、通計金貳萬六千六百七拾貳圓貳拾參錢參厘ハ

明治十九年十二月ヨリ明治二十四年十一月迄据置明治二十四年十二月ヨリ明治三十二年十一月迄向フ八ケ年賦左ノ割合ヲ以テ毎年十月二十日限上納スベシ

- 一、麥酒醸造場地所代金參百九拾八圓參拾錢五厘ハ毎年金四拾九圓七拾八錢八厘末年ハ金四拾九圓七拾八錢九厘
- 一、建物代金壹萬七千五百七拾貳圓九拾五錢貳厘ハ毎年金貳千百九拾六圓六拾壹錢九厘宛
- 一、器具代金八千五拾三圓六拾壹錢六厘ハ毎年金壹千六圓七拾錢貳厘宛
- 一、備品代金六百四拾七圓參拾六錢ハ毎年金八拾圓九拾貳錢宛

第二條 第一條ノ金額完納ニ至ル迄ハ拂下タル地所建物器械其ノ他ノ物品ハ一切抵當トシテ當廳へ差出スベシ

第三條 麥酒醸造改良ノ爲メ別紙條約大要ニ依リ雇入タル醸造師ノ獨國伯林府ヨリ札幌ニ至ル旅費ト同上歸國旅費及就任ノ月ヨリ向フ三ケ年間ノ給料ハ當廳ヨリ交付スベシ

第四條 醸造上ニ關シ醸造師ヨリ當廳ニ向ヒ申出ヅル事件ハ總テ其社ニ於テ採否ヲ決シ然ル上申出ヅベシ

第五條 麥酒醸造場ハ當道農産消流ノ目的ヲ以テ設置セシ工場ナルガ故其醸造ノ原料タル大麥ハ必ず當道産ノモノヲ用ヒ毎年醸造高ハ七百石ヲ減ズベカラズ 但シ當道産ノモノ買入レ難キ事由アルカ又ハ醸造高ヲ減ゼザルヲ得

ザル場合ニ於テハ豫メ當道廳ノ指揮ヲ受クベシ

第六條 前條當道産大麥買入値段ハ該年東京、大阪及宮城三ヶ所ノ相場ヲ標準トシ其價格ヲ定ムベシ

第七條 事業ノ實況及抵當現品其他會計ニ屬スル帳簿等ハ臨時係員ヲ派出シ検査セシムル事アルベシ

第八條 工場其他建物ノ模様替及器械ノ交替ヲナサントスル時ハ其都度當廳ノ許可ヲ受クベシ

第九條 此命令ニ違背スルトキハ拂下ヲ取消スベシ、此場合ニ於テ拂下タル地所建物業其他一切ノ物件ハ現形ノ儘返納セシム且既納ノ年賦金ハ一切下戻サ、ルモノトス

右命令ス

因に後明治二十二年十月會社より五十ヶ年賦利引一時上納を願出で五千二百八十九圓一錢七厘を上納し、前記命令書第五條乃至第九條と大同小異の命令書を再び交附せられた。拂下當時より明治二十六年に至る期間に於ける札幌麥酒會社の狀況は次の通りである。

一、資本金、株主數、職工數、雇人數

年次	資本金	拂込額	株主數	職工數	雇人	年次	資本金	拂込額	株主數	職工數	雇人
明治二十年	10,000円	—	—	—	—	明治二十四年	100,000円	—	—	—	—
"二十一年	70,000	—	—	—	—	"二十五年	100,000	83,260	—	—	—
"二十二年	70,000	49,000	—	—	—	"二十六年	100,000	83,000	—	—	—
"二十三年	100,000	20,000	—	—	—						

二、醸造高及收支狀況

醸造高は二十一年の命令書に基き特別の事情なき限り一ヶ年七百石を下ることが出来ないことになつてゐたが、二十五年は醸造場及貯藏場等の改築に着手した爲所定高を擧げ得ず、又二十六年も醸造機械据付工事並に工場内修繕に時日を費し六月中漸く竣工を見たが、醸造期を過ぎ且つ据付機械に小破損を生じた爲修繕を加へた等のことにより充分の醸造を爲し得なかつた。

次に營業狀況に就いて述べんに、北海道廳より派遣せられた獨逸人マックスポールマンにより機械設備を改め、従來の醸造に改良が加へられ、品質醇良を増した爲世人の嗜好に適し、販路の如きも道内は勿論奥羽、新潟、東京等へ移出せられるに至り、漸次業績を擧ぐるに至つた。因に明治二十年以降に於ける醸造高並に營業狀況は次表の如くである。

年次	醸造高	収入	支出	差引損益	年次	醸造高	収入	支出	差引損益
明治二十年	576石	9,264円	14,523円	5,259円	明治二十四年	992石	37,733円	28,444円	9,289円
"二十一年	395	10,216	17,216	6,993	"二十五年	622	16,515	15,889	626
"二十二年	440	15,907	20,740	4,833	"二十六年	—	11,333	21,044	9,711
"二十三年	483	16,598	14,217	2,381					

備考 二十年より二十二年まで三年間缺損を生じてゐるのは、創始日淺き爲多額の經費を要したことと、設備機械に改良を加へたことに因る。二十三年は九月に至り製品に支障を生じ、一時遠地輸送を中止するのやむなきに至り、加ふるに原料大麥

の騰貴を來したにも拘らず利益を擧げることが出來た。二十五年から二十六年に亘り新式機械の据付、工場諸設備の改修を行つた爲、兩年の業績は思はしくなかつた。

十四、葡萄酒、洋酒業

札幌葡萄酒醸造場は明治十九年九月より桂二郎が委託經營をしてゐたが、二十年八月迄一ケ年間の葡萄酒、葡蘭地醸造高八十九石で此の價格三千九百圓、諸經費四千九百九十六圓餘を費し、差引一千百餘圓の損失を來し、同年十二月十日桂二郎の願を容れ、葡萄酒を併せて金一千八百八十六圓餘を以て拂下げられた。

其の命令書は次の通りである。

命 令 書

- 第一條 土地代價ハ實測坪數ニ應ジ壹段歩金貳圓五拾錢ノ割ヲ以テ上納スベシ
- 第二條 建家十四棟ニ對シ金貳百七拾九圓七拾八錢貳厘上納スベシ
- 第三條 器具機械等ニ對シ金四百拾九圓拾錢七厘上納スベシ
- 第四條 許可ノ日ヨリ九十日以内ニ代價上納セザルトキハ此指令ハ無効タルベシ

明治二十年十二月十日

北海道廳長官 岩 村 通 俊

斯くして事業を續け、明治二十二年より花菱葡萄酒醸造所と稱へてゐたが、二十四年十一月谷七太郎の經營に移り

會社組織に改められ、後谷葡萄酒醸造場とも呼ぶに至つた。以下二十三年より二十六年に至る狀況を記すこととする。

一、原 料

原料用葡萄は、苗穂葡萄園に産するものを使用したことは前編に記した通りであつて、二十三年の如きは一万八千貫目を消化し、少い年でも八千餘貫目を消化してゐる。

二、生 産 高

年 次	葡 萄 酒	葡 蘭 地	年 次	葡 萄 酒	葡 蘭 地
明治二十三年	一八〇・〇石	六・五石	明治二十五年	二七・五石	一石
〃 二十四年	一五〇・〇	—	〃 二十六年	二九・〇	三・三

三、收 支 状 況

收支狀況は次の通りであるが収入金額中には手持製品の推算價格が加はつてゐるので、實際に販賣した収入との間には相當の開きがある。例へば二十五年の如き四千餘圓の収入となつてゐるが、販賣は二千七百餘圓に過ぎない。販路は北海道一圓、東京、大阪、京都、名古屋並に奥羽（主として青森、宮城）地方であつた。

年 次	收 入	支 出	年 次	收 入	支 出
明治二十三年	五、三六五円	四、二六七円	明治二十五年	四、一三三円	五、一〇一円
〃 二十四年	四、一四〇	三、五〇〇	〃 二十六年	二、〇〇〇	五、四〇〇

因に二十六年に於ける支出中には葡萄園定雇夫給料五百五十五圓五十錢、使用人夫延二千六百三十六人（一人一日二十五錢）の賃金六百五十八圓九錢が含まれてゐる。

四、使用職工數

年次	二十年	二十一年	二十二年	二十三年	二十四年	二十五年	二十六年
職工數	10	10	11	10	10	5	5

尙二十一年に於ける營業成績は收入三千三百七圓に對し支出八千圓となつてゐる。

十五、酒造業

札幌に於ける酒造業は最初より民業に依つて營まれてゐた事は既に陳べた如くであるが其の後漸次製造戸數を増し明治二十四年には戸數三十七戸、二十五年には三十六戸を數ふるに至つた。尙當時に於ける主なる製造業者は前に記した柴田與次右衛門等十名の外左の四名であつた。

- 岩瀬 庄右衛門 南七條西五丁目 農産物商を兼ね
- 林 甚之助 南四條西四丁目 醬油味噌をも醸造し傍ら米穀商を營む
- 波多野 與三郎 南四條西二丁目 荒物商を兼ね
- 朝明門 吉 南一條西六丁目

次に酒造稼人數は二十年五十一名、二十一年二十九名であり、又醸造高は二十四年清酒九、六四七石、濁酒四四石

焼酎四一石で、其の他を加へ九、七三四石、二十五年は清酒一〇、四三三石、濁酒八六石、焼酎三五石で其の他を加へ一一、二二七石であつた、尙當時に於ける酒造稼人の一日の賃金は十五錢乃至五十錢であつた。

十六、味噌醬油醸造業

明治二十年から二十六年迄の期間に、札幌市に存在してゐた味噌醬油醸造業者は左の通りである。

- 1. 味噌醬油醸造場（對馬嘉三郎） 第一 北二條東四丁目 創業 明治十一年九月
第二 北五條東一丁目
- 2. 味噌醬油醸造場 北五條西二丁目 明治十九年五月
- 3. 齋藤丸竹味噌醸造場 " 明治二十年一月
- 4. 巴醬油醸造場（福山甚三郎） " 明治二十四年十月
- 5. 林 甚之助 南四條西四丁目
- 6. 田中 善吉 南一條西五丁目
- 7. 古谷 兵作 北一條西七丁目

前掲中對馬嘉三郎醸造場は開拓使第一、第二醸造場の後身であり、其の他は何れも民業として創立せられたものである。

猶味噌醬油醸造場の規模、醸造高、收支狀況等は殆んど判明しないが(1)及(2)即ち對馬嘉三郎醸造場の狀況は次の通りである。

年次	(1) 對馬嘉三郎醸造場			(2) 味噌醬油醸造場		
	醸造高	職工雇人	収入支出	醸造高	職工雇人	収入支出
明治二十年	一七、〇〇〇石	10	一、五〇〇円	—	—	—
〃二十一年	—	—	—	一八、〇〇〇石	—	—
〃二十二年	一五、〇〇〇	九	—	一〇、〇〇〇	二	四、〇〇〇円

猶二十一年に於ける札幌の醬油醸造工は二十九名であり、一日の平均賃金は年に依つて異つてゐるが、十五錢乃至五十錢程度であつた。

十七、製粉業

官營新舊兩製粉場が十九年末民間に貸下げ或は拂下げられたことは、前編に記した如くであるが、貸下げられてゐた舊製粉場も間もなく借主に拂下げられ、擧げて民業に移つた。

以下兩場の二十六年に至る期間に於ける状況を掲げることとする。

一、舊製粉場

明治二十年五月借主宮原景雄の願出に依り設備一切を九百七十一圓七十五錢十ヶ年賦（二十三年に年賦一割引五ヶ年賦に改む）納入の約を以て拂下げられた、斯くて本場を三扇工場と稱へてゐたが後札幌第二製粉場と改めた、本場は拂下げ後精米機を新設し専ら精米挽割を業としてゐた。尙二十三年に於ける資本金は五千圓であつたが、二十

四年一千三百圓全額拂込とし二十五年三千圓に二十六年四千圓に改めてゐる。

製造高、收支關係、従業員等の概況は次の如くである。

製造高 二二八石 六〇七圓（二十二年）

收支狀況

年次	収入	支出	年次	収入	支出
明治二十年	六〇七円	—	明治二十一年	一、六五三円	—
				明治二十一年	一、三四四円
					一、三四四円

従業員數

職工	明治二十一年	明治二十二年	明治二十三年	明治二十四年	明治二十五年	明治二十六年
雇人	四	—	—	—	—	—
職工	四	六	八	八	四	六

二、新製粉場

新製粉場は拂下げ後札幌製粉場と稱へてゐたが二十三年三月後藤半七外四名より本場並に乾燥器拂下げ年賦金の割替利引一時上納の申請を爲した結果拂下代金三千七百二十九圓七十一錢乾燥器拂下代金二百五十九圓六十五錢即納のことに決した。斯くして資本金を五万圓と定め事業の擴張を圖ると共に原料麥の耕作を奨励した結果業績の見るべきものがあつた。

- 一、本社を札幌製糖會社と稱すること。
- 二、興業費、營業費を合せ四十万圓を募集し滿三十ヶ年を一期として營業すること。
- 三、株金募集の上製糖所建築落成迄は株金拂込の翌日より起算し一ヶ年五朱に相當する利子下付を仰ぎ營業開始の後純益配當一ヶ年五朱に達せざるときは營業開始四ヶ年間不足補給を受くること。
- 四、製糖所の位置の選定及器械購入建築を始め一ヶ年間は總て道廳の指揮を受くること。

命 令 書

第一條 其會社ノ株金募集ノ翌月ヨリ營業開始ノ日マデ其拂込金額ニ對シ一ヶ年五銖ノ割ヲ以テ利子ヲ下付シ營業開始ノ後純益ノ配當一ヶ年五銖ニ上ラザルトキハ拂込株金ニ對シ年五銖迄ノ不足額ヲ補給スベシ

第二條 前條ノ純益金トハ會社總收入金ヨリ營業費及起業資本額ノ二十分ノ一ヲ引去リタル自餘ノ金額ヲ云フ

但シ總收入金ヨリ本文ノ金額ヲ引去ル能ハザル場合ハ拂込株金額ノミニ對シ年五銖迄ノ不足額ヲ補給スルモノトス

第三條 第一條利子下付及利益保證年限ハ通シテ滿六ヶ年間トス

第四條 利益保證年限中其會社ニ於テ北海道人民ヨリ購入スル甜菜ノ價格ハ毎年北海道廳長官ノ認可ヲ經テ之ヲ定ムベシ

第五條 利益保證年限中ハ相當ノ事故ナクシテ北海道民ニ對シ甜菜ノ購入ヲ拒ムヲ得ズ

第六條 利益保證年限中左ノ各項ハ株主總會ニ於テ議決ノ上北海道廳長官ノ認可ヲ經テ執行スベシ

- 一、會社ノ定款ヲ更正スル事
- 一、會社ノ資本金ヲ増減スル事
- 一、會社ノ負債ヲ起ス事

第七條 其會社收支計算並ニ營業上諸般ノ景況ハ毎年六月十二月ノ二季及取締役ノ當選解任ハ其都度北海道廳長官ニ申告スベシ

第八條 利益保證年限中北海道廳長官ハ臨時官吏ヲ派シ其會社ノ諸帳簿及財産物件ヲ検査セシムル事アルベシ

第九條 其會社ニ於テ此命令書ノ明條ニ違背スルトキハ北海道廳長官ハ之ヲ制止シ又ハ營業ヲ停止スル事アルベシ

第十條 北海道廳長官ニ於テ必要ト認ムルトキハ第一第二第三條ヲ除クノ外此命令書ヲ更正スル事アルベシ但シ此場合ニ在テハ豫メ其事由ヲ明示スベシ

明治二十一年四月二十五日

斯くして事業は進められ二十三年八月堀宗一に代り伊藤祐之社長となつたが幾許もなく役員、株主間に紛争起り二十四年七月偽造株事件勃發し前社長は自首し他の重役は拘引せられ、北海道廳第二部長の職を退いた淺羽靖が社長の職に就き經營の任に當つたが紛擾治まるべくもなく一般の信用を失ひ、株價亦極度に下落し會社の前途に對し不安を生ずるに至つた。

以下同社の創業より二十七年に至る期間に於ける事業の概要を掲げることとする。

前記の如き作業日程は道路泥濘の爲め積雪を待つて原料を馬橋を以て運搬をした關係である。
三、收支狀況

二十四年及二十五年に於ける收支狀況並に命令書に據り補給を受けた利子は次の通りである。

年次	收	入	支	出	差引	損失	補給	利子
二十三年		一、〇、三、八三						
二十四年		八、七三三		二、二九〇		二、五五六		一七、二四八
二十五年		五、三六六		三、六〇一		一八、一〇五		三〇、五五二

以上が會社の全貌であり製麻、麥酒と相並び札幌に於ける三大工業を以て目されてゐたが種々の蹉跌から明治二十七年頃解散し其の跡を斷つて終つた。

尙最後に同社の難局に當つた社長淺羽靖の略歴を掲げて置く。

淺羽 靖 略傳

安政元年奈良縣に生れ明治八年大藏省租稅寮十五等出仕に補せられ累進五等屬となり十七年五月根室縣二等屬に轉じ收稅長に進みしが十九年一月廢縣と共に北海道廳理事官に任じ根室支部次長に補せられ札幌區長、八郡長、第二部次長を経て二十二年第二部長となり二十四年四月官を退き爾來各種の事業に従ひ三十七年以來衆議院議員に當選すること三回、立憲同志會幹部として重きを爲せり。尙四十一年以來札幌商業會議所特別議員の職にあり又夙に

教育に意を用ひ明治二十年私立北海英語學校長となり更に北海中學校を經營し校長たること多年、曩に明治三十七八年戰役の功に依り勳四等に敘し旭日小綬章を授けられ又大正三年には勅定藍綬褒章を賜はる。大正三年十月病の爲め歿す。

十九、精 米 業

前掲製粉場に於ける精米以外に札幌に於て精米の業に従事してゐたものは左の四である。(業者不明)

所在地	資本金	創立年月日	所在地	資本金	創立年月日
北六條西一丁目	六、〇〇〇 ^円	明治十八年四月	字中島	五、八三三 ^円	明治二十年十一月
北五條東二丁目	同	二十一年十一月	南五條西二丁目	一、三〇〇	同 二十二年 一月

二十、製 餡 業

岡本製餡所が明治二十六年五月に北二條西二丁目に於て開業せられた。

二十一、印 刷 業

開拓使に依つて營まれてゐた印刷事業が明治十九年五月民業に移り、札幌活版印刷所と稱へたことは前編に述べて置いたが、文化の進展に伴ひ新聞、雜誌、株券、商標、官廳會社商店諸帳簿用紙等の注文激増し事業は順調に續けら

れてゐた。即ち二十六年に至る七年間の状況は次の如くである。

年次	資本金	職工雇人	收	入	支	出	年次	資本金	職工雇人	收	入	支	出
二十年	四、五〇〇 ^円	六		二、四六 ^円		九、六七 ^円	二十四年	六、〇〇〇 ^円	六				
二十一年	三、五〇〇	六		二、七六		一、三九	二十五年	九、〇〇〇	六				
二十二年	四、五〇〇	六					二十六年	三、〇〇〇	三				
二十三年	六、五〇〇	六											

猶同印刷所の外に、此の時代に札幌に於て活版印刷に従事してゐたものを掲げてみると次の如くである。

所名	創立年月日	所在場所	所名	創立年月日	所在場所
北海石版印刷所	二十六年二月創立	南三條西六丁目	大進堂(大中米次郎)		南一條東二丁目
北進堂		大通西四丁目	北門活版所		大通西四丁目
北明館		大通西四丁目	陽明堂	二十六年五月創立	南一條西一丁目
東京文昌堂出張所		南二條西三丁目	日盛館	二十三年五月創立	南一條西二丁目

二十二、馬具製造業

明治二十年より二十七年に至る期間札幌に馬具を製造してゐたものは左の通りである。

店名	所在場所	資本金	創立年月日	職工数
馬具製造所(黒柳喜三郎)	南一條西二丁目	一、二六—三、八〇〇 ^円	明治十一年三月	六—九 ^名
金子工場(金子兼吉)	南一條西三丁目	二、〇〇〇	明治十七年四月	五—八
龜谷馬具商店	南四條東三丁目	一、五〇〇—五、〇〇〇	明治十八年十月	三—八
島口商店	南三條東二丁目		明治二十四年十月	

黒柳の馬具製造所は開拓使から引繼いたもので、後前記の場所に移轉したものであり、金子工場は開拓使改良課に雇はれてゐた馬具職工が後に獨立したものである。(第一編馬具に對する古老の談参照)

二十三、製靴業

靴業は明治十一年三月岩井信六に依つて始められてゐるが、當時は靴の販賣並に修繕をなすのみで、製造はしてゐなかつた。何時の頃から靴の製造を開始したかは詳でないが、後に岩井信六は靴製造所を南一條西二丁目に設け職工の如きも相當に使用してゐた。二十一年以降に於ける状況は次の通りである。

年次	資本金	職工数	收	入	支	出	年次	資本金	職工数	收	入	支	出
二十一年	三、七七八 ^円	一〇		四、一九		一、四四三	二十四年	三、〇〇〇	一八				
二十二年	三、〇〇〇	一五				三、〇〇〇	二十五年	三、〇〇〇	一七				
二十三年	三、五〇〇	一八				三、〇〇〇	二十六年						

二十四、電 氣 業

明治二十二年八月札幌市北四條西三丁目（翌年大通西三丁目七番地に移る）に北海道電燈株式會社が設立せられた
 資本金は初め十六万圓であつたが、翌年八万圓に改め一株の金額も初めは五十圓であつたが二十五圓に改めた。設立
 當時の株主は三十二名で社長岡田昌作、役員對馬嘉三郎、金子元三郎であつた。同社は二十四年十一月より營業を開
 始し電力は火力發電に求めた。當時の線路延長は一里五丁二十七間線條總長六里十五丁であり、二十五年より二十六
 年初に於ける需用家は百十戸で點火數五百四十燈であつた。

尙電燈の種類及料金は次の通りであつた。

半夜燈（毎夜日暮より十二時迄點燈）

八燭力 九十錢、 十燭力 一圓二十錢、 十六燭力 一圓五十錢

終夜燈

八燭力 一圓六十錢、 十燭力 二圓、 十六燭力 二圓五十錢

不定時燈（客座敷、寢室等入用時のみ點火するもの）

八燭力 五十錢以上、 十燭力 六十錢以上、 十六燭力 七十五錢以上

此外二十四、三十二、五十、百燭力の電燈料金は十六燭料金の割合を以て増徴することゝなつてゐた。

次に同社の狀況を摘記すれば左の如くである。

年次	資本金	同拂込額	株主數	職工數	蒸氣機關數		年次	資本金	同拂込額	株主數	職工數	蒸氣機關數	
					馬力	數						馬力	數
二十二年	160,000		三	一	一	二十四年	10,000	11,600	六	八	100	二	
二十三年	10,000		一	三	一	二十五年	10,000	11,000	三	10	100	二	

猶當時市民の電燈に對する認識を證する資料として久松義典著北海道通覽明治二十六年六月十日發行の電燈に關する記事を掲ぐることにする。

殷煥電燈の効用

茄子形の玻璃球内に炭の細織を置き巧に球内の空氣を排除したるもの之を殷煥電燈と謂ふ之に電氣を通ずれば炭織光を放ちて燦爛たり今其効益の著しきものを擧ぐれば燈光極めて清鮮なり、室内の空氣を熱することなし、毒氣を醸生することなし、惡臭なし、眼に障ることなし、極めて安全なり、如何に燃え易き物質に接するとも決して失火の恐なし、勝手次第の場所に取附けること自由自在なり、風の爲めに明暗を生じ又は吹き消さるゝ等のことなし、マッチ其他の點火具を要することなし、故に便利なるのみならず失火の恐なし、數多の燈火を同時一齊に點火或は滅すること自在なり、室内の酸素を消費することなく且つ水分を生ずるなき故に決して人體の健康に害なし、煤煙を生ずることなく又硫化水素の如き有害の毒氣を發生することなき故に室内の飾粧即ち天井金物器具油繪窓掛敷物等を損し又は變色することなし、決して人の生命を危くすることなし、右の効益ある上に殷煥電燈は最も經濟なる燈火なりと云ふ。

二十五、土 木 業

本期間札幌に於て土木營繕業を營んでゐたものは左の三社であつた。

所 名	所 在 場 所	資 本 金	内 拂 込	創 立 年 月
北 海 道 土 木 會 社	南四條西一丁目 南一條東四丁目	十 萬 圓	三 萬 圓	明 治 二 十 二 年 十 二 月
札幌工事請負會社	北四條西十四丁目	二 十 萬 圓		明 治 二 十 三 年 八 月
				明 治 二 十 三 年 三 月

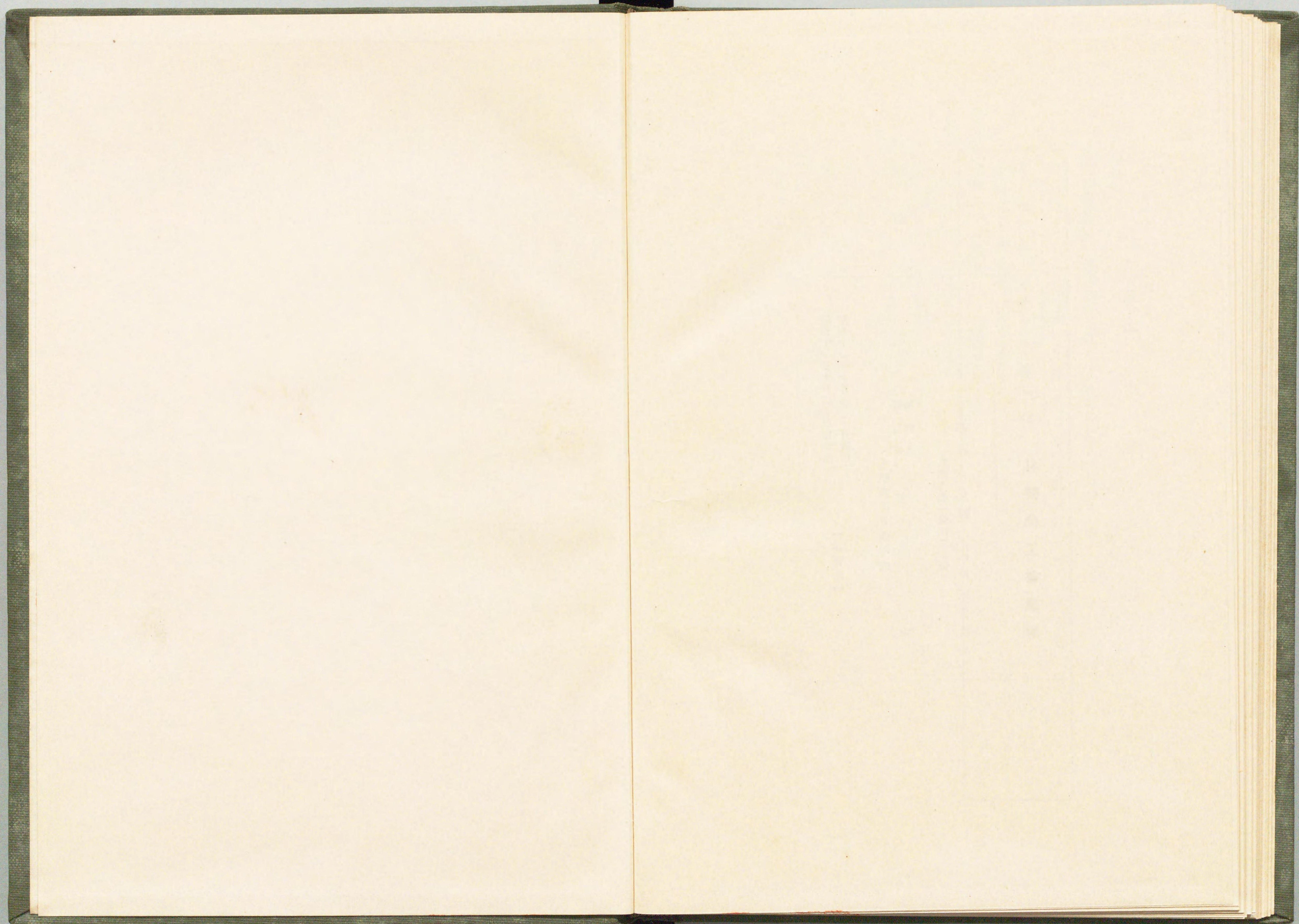
昭和十一年十月二十五日印刷
昭和十一年十月三十日發行

【非賣品】

札幌商工會議所内
發行人 兼 編輯人 吉 田 寧

札幌市北一條西二丁目
印刷所 札幌印刷株式會社

發行所 札幌商工會議所



150



